

新型コロナウイルス感染症予防対策下における 体育的行事の事例分析

—小学校における保健学習を発展させた子ども主体で創る運動会に着目して—

玉腰 和典¹ 制野 俊弘² 岨 賢二³

Case Analysis of Physical Education Events under Preventive Measures against COVID-19 Infection

—Focusing on a Child-Centered Athletic Meet Related to Health Learning in
Elementary School—

TAMAKOSHI Kazunori, SEINO Toshihiro, SOWA Kenji

Email: tamakosi@edu.u-toyama.ac.jp

【摘要】

2020年度の学校教育は、新型コロナウイルス感染症の予防対策のために、様々な活動が制限された。こうした中で、C小学校においては、E教諭を中心とする教職員の連携的な指導体制によって、保健分野の学習を発展させた体育的行事を子ども主体で創造した。そこで、本研究では、C小学校の実践を分析対象として、新型コロナウイルス感染症の予防対策下における体育的行事実践の実態を解明することを目的とした。結果、C小学校の運動会づくりにおける指導の特徴として、子どもの生活的な願いや想いを運動会づくりの出発点にしている、運動会づくりの目標・内容・方法・総括のトータルな自治指導が実施されている、主体性発揮の基盤となるテーマづくりを重点的に指導している、保健学習を発展させた自治内容を指導している、教職員による連携体制が構築されていることを解明した。一方で、それぞれの観点について、子どもの主体性をひきだす教師の指導や連携体制、低学年によるテーマの理解、具体的な感染予防対策、「お祭り」としての運動会の演出といった点に課題がみられることを解明した。最後に、本事例からはあらためて運動会の根源的な価値が顕在化しており、運動会の位置づけ方があらためて問われていることを課題提起した。

キーワード：体育的行事，自治，意志表明，保健学習，教科と教科外の統一

Keywords：physical education events, self-government, Expressing will, Health Learning, Unification of subjects and non-subjects

I 研究の背景と目的

2019年12月から新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が蔓延し、感染予防対策のために世界的な規模で様々な行動制限がなされた。学校教育においても、政府の要請により2020年2月28日から一斉休校となった。4月からは、文部科学省が提示する「学校における新型コロナウイルス感染症に

関する衛生管理マニュアル～学校の新しい生活様式～」にもとづき、教育活動を実施することとなった。授業では、3密(密集・密閉・密接)を回避することが必須となり、教具等の共有や話し合い活動も制限され、さらには、様々な行事が中止せざるをえない事態となった。経済活動の低下にとともに、家庭においても様々な負担がのしかかり、子どもたちの生活にも大きな影響をもたらした。

国立生育医療研究センター(2020)では、2020年9月1日から10月31日までの期間に、全国の小学校1年生から高校3年生(相当)の子ども2,111名および0歳～高校3年生(相当)の子ども

¹ 富山大学学術研究部教育学系

² 和光大学現代人間学部人間科学科

³ 兵庫県南あわじ市立松帆小学校

者 8,565 名（合計 10,676 名）を対象にした、web「コロナ×こどもアンケート」を実施した。その結果、日常生活において、睡眠不足の反応がある子どもは 4 割、ストレス反応がある子どもは 7 割、登校拒否の反応がある子どもは 3 割となった。さらに、2020 年の小学生・中学生・高校生の自殺者数も、統計データがある 1980 年以降で過去最多となり、昨年よりも 1.4 倍多くなっている（文部科学省、2021）。このように、感染予防対策がとめられる中で、生活リズムが崩れ、慢性的なストレスを抱えている子どもが多くいる。子どもたちが感情を表出したり、自己を表現したりする機会が喪失していることが見受けられる。

制野（2020）は、社会や学校で新型コロナウイルス感染症の予防対策が徹底される中で、「コロナ禍で子どもが学んだことが、『何かが起こったら子どもは大人に従うもの』『大人をつくった規則には異議を申し立てないこと』という思考と行動規範だとすると、子どもの主体者意識はますます後退します」（p.79）と指摘し、管理対象としての子どもの像が拡大することに警鐘を鳴らしている。感染予防対策をしながら、子どもたちが学校現場で他者と協働しながら、主体的に活動できる学習を組織することが重要な課題となっている。

特別活動は、「集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する」（文部科学省、2017、p.183）教育活動であり、コロナ禍における子どもたちの生活的な課題を対象化する。特に、体育的行事として実施される運動会は、学校規模で運動会づくりのための自治的活動を組織できるとともに、様々な身体競技種目や身体表現種目を通して、子どもたちが心身を解放できる教育活動である。そのため、コロナ禍において、春の運動会が中止となっても、秋の運動会を開催する学校や、スポーツフェスティバルなどの類似した活動を運動会の代替行事として開催する学校がみられた。文部科学大臣も、2020 年 9 月 4 日の記者会見で、運動会や体育祭を積極的に開催してもらいたいと意見を述べた（文部科学省、2020）。

2020 年度に C 小学校は、新型コロナウイルス感染症の感染予防対策を実施した上で、運動会を開催している。C 小学校の運動会実践の特徴は、体育主任である E 教諭を中心にした教職員の連携体制に

よって、自治的活動を重要視した子ども主体の運動会を創造していることである。加えて、その自治の範囲は、運動会づくりの目的・内容・方法・総括と総合的である。また、コロナ禍だからこそ、保健分野の学習を発展させた自治的活動を指導している。これまでの運動会実践では、教科体育における器械運動や陸上運動、ダンス教材を中心にして、教科と教科外の統一がめざされてきた。教科体育における実技学習が土台となって、運動会における子どもたちの自治的活動を発展させていた。しかし、今年度においては、運動会を開催するために、新型コロナウイルス感染予防対策がとめられ、保健分野の学習が不可欠となった。それにともない、C 小学校でも、子どもたちの自治的活動の重点として、保健学習に関連する内容が含まれていた。こうした実践的展開は、これまであまり報告されたことがなく、保健分野の学習を発展させる新たな運動会づくりの可能性を提起する事例となる。

さらに、運動会がもつ特質にも着目したい。神谷ら（2013）は、城丸（1993）の主張をふまえ、運動会を教師、生徒、地域住民による「連帯と団結の意志表明の場」と定義している。運動会は、歴史的にも学校と地域とが結びついた教育活動であり、運動会当日には、開閉会式や競技種目において、時代的・地域的な「意志」が表明される。特に、感染症や災害のように、社会的・地域的な問題が発生している場合においては、その「意志」が強いメッセージ性をもって表明されることになる。たとえば、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災においては、津波被害や福島第一原子力発電所の事故の影響で、地域全体の家屋や施設が崩壊し、避難所から学校に通学せざるをえない子どもたちが多くいた。こうした中で、被災地の運動会は、地域住民の再会の場となり、さらには、地域住民とともに、被災で亡くなった方の鎮魂や地域の復興を願う場となった（制野、2012、渡辺、2012）。したがって、新型コロナウイルス感染症が世界的規模で拡大する中で開催された運動会においても、独自の意志が表明されたことが想定される。

そして、こうした運動会を開催する背景には、教職員の連携体制が不可欠となる。学校全体の行事を企画・運営することから、E 教諭が中心となりながらも、様々な部分で教職員が連携していることが想定される。また、教職員の連携体制は、もともと構

築されていたC小学校の同僚性が基盤となっていると考えられる。新型コロナウイルス感染症が蔓延する中で、子ども主体の運動会づくりを決断することは、教職員の意志統一なくして不可能である。加えて、E教諭は、運動会づくりの過程で、子どもたちが家庭で保護者と交流するよう意図的に働きかけていた。そのことは、自治活動を支援する要因になったと考えられる。

以上より、新型コロナウイルス感染症予防対策下における運動会実践においては、保健分野の学習を発展させた、これまであまり例のない自治的活動が組織されており、また、地域住民を含めた強い意志が表明されている可能性がある。自治活動を保障する教職員や家庭との連携体制も想定される。したがって、その実態解明は、かつて東日本大震災後の運動会と同様に、運動会の教育的価値を再考する契機になると考えられる。

Ⅱ 研究の目的

本研究では、新型コロナウイルス感染症予防対策下における体育的行事実践の実態を解明する。分析は、運動会における自治指導、意志表明の内容、保健学習の発展、教職員や家庭との連携を観点とする。

Ⅲ 研究の対象と方法

研究対象は、A県B市立C小学校（全校約160名規模、各学年単学級編成）で実践された運動会である。ただし、C小学校の位置づけとしては、中止となった春の運動会の代替行事であった。そのため、運動会ではなく、地域の名称をつけた「D祭」という名称となっている。ただし、C小学校の指導体制や方針、内容などは運動会の形式に依拠していた。また、中心となったE教諭も、運動会づくりの指導を強く意識していた。加えて、E教諭は、新型コロナウイルス感染症の予防対策によって様々な教育活動が制約される中で、今こそ運動会における自治的活動の教育的効果をひきだしたいと考えていた。したがって、本研究では、C小学校の運動会実践として分析対象とする。

研究方法は、資料分析、アンケート調査、インタビュー調査を併用する。資料分析は、6年生担任の体育主任として実践を牽引したE教諭が実践過

程で作成した資料や実践報告資料、そして、6年生が記述する運動会後のまとめの感想文の分析である。なお、まとめの感想文は、運動会づくりの過程で最も印象的だった場面を記述させており、具体的な様子を把握することが可能となっている。インタビュー調査は、運動会づくりの過程について、E教諭への半構造化インタビューを実施する。運動会開催を決定した背景となる教職員の連携について、F校長へ半構造化インタビューを実施する。アンケート調査は、運動会の組織・運営の中心となった6年生（全35名）とその保護者（全34名）、教職員（全17名）を対象にして実施する。アンケートは、自治活動、意志表明が含まれるテーマの内容、保健学習と感染予防対策、教職員と家庭との連携の観点から成果と課題を分析できるように質問内容を構成し、4件法（そう思う、少しそう思う、少し違うと思う、違うと思う）と自由記述で回答するものとした。ただし、E教諭は、運動会を総括するために、全校生と教職員を対象にした6年生による事後アンケートを実施予定としていたため、内容が重複する点や作業量の負担に配慮する意向をもたれた。そこで、最終的には筆者らが作成したアンケート項目は、E教諭の判断で一部削除されたり、6年生による事後アンケートの方に設定されている。分析上必要と考えたため、本研究では、6年生による事後アンケートも分析対象とする。筆者らによる6年生へのアンケートは、2020年10月21日に実施し、E教諭による趣旨説明の後、その場で回答してもらい、回収した。保護者および教職員へのアンケートは、趣旨説明を記載した依頼文書を一緒にして、2020年10月21日に配布し、2020年10月28日までに回収した。6年生による教職員を対象にした事後アンケートは、E教諭の指導のもとで作成され、2020年10月30日に配布、2020年11月6日までに回収されている。6年生による事後アンケートは、4件法（すごく良かった、良かった、あまり良くなかった、良くなかった）と自由記述の設問で構成されている。

アンケートの自由記述については、内容分析を実施し、カテゴリーを構築する。内容分析は、次のような手順をとる。まず、記述内容を、意味のまとまりごとに文章を区切り、通し番号をつける。その後、質問内容とは関連のない回答を除外し、分析データへと加工する。そこから、記述内容の対象が教師か子どもか、成果か課題かを明確にした上で、分析デー

タを意味内容で分類し、カテゴリーを構築する。これらの作業は、保健体育科教育学を専門領域とする研究者および10年以上の学校現場経験者で協議しながら実施した。なお、以下、分析結果を記述する際には、対象を《》で、成果か課題かを【】で、カテゴリーを「」で表記する。また、分類された内容に関する記述数は、内容の後ろに(n数)を表記する。

IV. 実践の概要

1. 実践の経緯

C小学校でも、4月からの学校再開後は、文部科学省のガイドラインに依拠して感染予防対策がとめられ、運動会や水泳が中止となる。5月になると、E教諭が担任する6年生が、「コロナ禍でこれまでの生活が幸せなことだったと気づいた」と日記に綴ってきた。この日記からE教諭は、コロナ禍でも子どもたちは何かを学びとろうとしていることを知る。また、別の子どもたちから、「自分たちがリーダーとなって活躍できる運動会がなくなって悲しい」という声を聞く。そこで、E教諭は、子どもたちの現在の想いや運動会への意欲を確認するため、6月3日に自作のアンケートを実施した。すると、多くの子どもが感染予防対策で我慢を強いられていることや、6年生全員が「運動会をやりたい」と考えていることを把握する。結果をふまえてE教諭は、子どもたちのコロナ禍にあっても学ぼうとする姿勢に応えたい、また、子どもたちに育まれた自治活動への意欲を、運動会づくりで発揮させたいと考えるようになる。

そして、E教諭は、運動会開催にむけて、子どもたちから協力者を募集し、2つの調査を実施している。1つは、6月10日に実施した自治調査である。

表2. 自治調査の結果（資料をもとに筆者作成）

協議事項	教師	児童と教師	児童	全校生	その他
運動会テーマ					児童会
全校生アンケート			○		
運動会の企画		○			
運動会の運営		○			
運動会の日程	○				
6年生競技の決定			○		
各学年競技の決定					各学年
運動会の準備・片付け			○		
校長交渉			○		
保護者や地域への案内		○			
案内状の作成		○			

これは、神谷（2017）による運動部活動の自治調査を改変したもので、運動会をつくる上で必要なことを誰が決定するのかを、一覧表を活用しながら協議するものである。E教諭は、この調査を実施することで、子どもたちの力でどこまで創造するのかという自治活動の目標設定をさせている。表2は、自治調査の結果である。表2のように、「運動会の日程」以外は、「児童と教師」、「児童」、「その他（児童会・各学年）」で決定しており、ほぼすべての決定に、子どもたちが参加することを合意形成している。もう1つは、運動会開催の希望を確認するために、6月17日に実施した全校生を対象とする自作のアンケート調査である。調査では、「運動会をしたいですか」「運動会をするとしたら全校生でしたいですか。学年合同でしたいですか」を質問している。この結果から、E教諭は、いずれの学年においても、多くの子どもが運動会開催を希望しており、また、全校生での実施を希望していることを把握した。

E教諭は、これらの調査結果をふまえて、子どもたちで創る運動会を6月24日の職員会議で提案した。教職員からは、「チャンスですね。これからの運動会を考えるととてもよい機会になる。子どもたちが自ら創っていくような、子ども主体の運動会にしましょう」といった肯定的な意見が交流され、子どもたちが創る運動会開催が決定した。ただし、運動会開催にあたっては、感染予防対策の観点から平日の午前中のみで実施すること、時間短縮のために競技を精選すること、通常の運動会とは異なる体制・名称で実施すること、「やりたくない」と回答した子どもに配慮し、終了後には総括することなどがのちに確認されている。

2. 自治的活動を保障する体制づくり

その後、E教諭は、子どもたちと運動会の目標づくりをするために、6年生で、「何のために新しい運動会をするのか」を協議しながら、運動会のテーマ設定やその進行方法を確認している。具体的な手順としては、2～6年生のテーマ案を収集し、そこから6年生の児童会を中心に協議することが確認されている。各学年へのテーマ案の検討依頼や収集は、児童会が担当している。

しかし、児童会の活動内容が多くなりすぎることが想定された。そこで、E教諭は、7月2日に6年生で実行委員会を組織し、運動会のキャラクターや

名称を検討したり、児童会と合同で運動会のテーマを検討したりするよう確認している。そして、7月8日および15日に新型コロナウイルス感染症に関連する保健学習（以下、コロナ学習と省略する）をしながら、7月22日および27日に運動会づくりのための組織体制づくりをしている。もともとC小学校では、運動会の種目について、各学年で1つの「競争種目（競い合いを目的とするもの）」と1つの「競遊種目（楽しむことを目的とするもの）」があり、それに加えて、全校生競技と全校生演技が位置づけられていた。そのため、組織体制づくりでは、種目検討の部を最初に確認し、続いて、今年度必要となる新たな役割を協議している。結果、実行委員会と児童会とは別に、5つの組織（全校生演技部、全校生競技部、6年生競技部、コロナ対策部、プログラム・旗部）を設置している。実行委員会と児童会に所属しない残りの6年生は、このいずれかに所属し、それぞれの役割で準備作業を進行することとなる。なお、例年の形式に依拠して、児童会は5年生の担任が主担当となり、全校生競技部は4年生の特別支援学級の担任が主担当となっている。また、6年生の特別支援学級在籍の児童がいたため、プログラム・旗部にも教員がついている。

運動会づくりの組織体制が整備されてから、E教諭は、7月29日に保護者アンケートを実施し、保護者の意向を確認した。結果、すべての保護者が実施を肯定する意見を記述していた。なお、E教諭は、保護者アンケートの回答をすべて学級通信に掲載して、子どもたちとも共有している。肯定的な回答を受けて、以後、本格的に運動会開催のための各部の自治活動が実行されることになる。

表3. 運動会当日のプログラム

番号	学年・種目特性	「名称」・内容
1	全学年・開会式	学校長・PTA・児童会挨拶、選手宣誓、チームごとの応援合戦
2	3年・競争種目	「2525（ニコニコ）」・障害物リレー
3	1年・競争種目	「ゴールをめざして～みんなが1ぼん～」・短距離走
4	5年・競争種目	「チームプレー 勝利をめざせ！」・リレー
5	全学年・競遊種目	「空に向けて4つの玉」・玉入れ
6	4年・競遊種目	『めっちゃ楽しいで!!』4年オリジナル障害物リレー～Go To GOAL～・障害物リレー
7	2年・競遊種目	「にんじゃ合戦」・走・投混合種目
8	6年・競遊種目	「親子いっしょにがんばるぞ!!」・障害物走
9	全学年・表現種目	「南中ソーラン」・身体表現
10	全学年・閉会式	教頭・児童会挨拶、引き継ぎ式

3. 当日のプログラム

自治活動の結果、当日の運動会のプログラムは、表3のようになった。種目は、午前中で終了するよう、各学年種目を1つと、全校生の演技および競技を1つずつ実施する内容となっている。

V 自治活動の指導と連携体制

1. E教諭による自治指導の方法

上述したように、E教諭は、自治調査を実施して、子どもたちが何をどこまで創るのか、目標を合意形成している。子どもたちがほぼすべての活動に参加することを表明したため、E教諭は、各部での活動だけではなく、テーマや組織体制づくりまでを子どもたちと協議している。

子どもたちとの協議の結果、各組織の自治内容は、表4のようになった。自治内容が決定する過程は、子どもたちの提案を教師が承認して決定した場合もあれば、教師がいくつか活動案の選択肢を提示し、子どもたちがそこから自分たちがやりたいと考える活動を選択して決定した場合もある。

また、E教諭は、運動会づくりの過程で、進捗状況を6年生全体で共有し、協議する時間を設定している。これにより、各部で決定したことを相互交流して準備の進度を調整したり、感染予防対策や各部で困ったことを6年生全体で協議したりしている。この活動報告を契機にして、全校生競技が提案した玉入れの方法を6年生で試技するなど、部同士が支援し合う仕組みをつくっている。

さらに、E教諭は、子どもたちに自治活動をさせる際、保護者と家庭で運動会の話をするように指導している。上述の保護者アンケートを学級通信に掲載することや、保健学習において保護者と文章で対談する「えんぴつ対談」（上野山・大津，2017，p.6）²⁾を宿題にすること、後述する運動会新聞を作成すること、個人懇談で運動会について保護者に意見を聞いたり、子どもたちと家庭で話をしてもらうよう要望したりと、保護者と運動会について交流する機会をつくっている。これにより、子どもたちの自治活動を家庭で支えてもらったり、運動会づくりを家庭に理解してもらったりすることをねらっている。

2. 各部の自治活動の具体的内容

子どもたちと協議して見通しを立てた自治内容で

表 4. 各部の担当名称と自治内容

担当名称	内容
実行委員会	<ol style="list-style-type: none"> ①行事の名前の募集・決定 ②マスコットキャラクターの募集・作成 ③テーマの検討（児童会の補助） ④新聞の発行 ⑤全校生競技・演技や6年生競技のスケジュール管理 ⑥1～5年生の競技内容と放送原稿の依頼・回収 ⑦校長・職員交渉 ⑧選手宣誓
児童会	<ol style="list-style-type: none"> ①開会式及び閉会式の企画・運営・司会 ②テーマの募集・検討と決定 ③応援合戦の検討と決定
全校生演技部	<ol style="list-style-type: none"> ①全校生演技の決定 ②練習内容の検討 ③準備物の確認
全校生競技部	<ol style="list-style-type: none"> ①全校生競技の決定 ②練習内容の検討 ③準備物の確認
6年生競技部	<ol style="list-style-type: none"> ①6年生競技の決定 ②練習内容の検討 ③準備物の確認（校長交渉を含む）
コロナ対策部	<ol style="list-style-type: none"> ①各演技についての審議 ②コロナ学習の全校発表 ③準備品の校長交渉 ④当日のコロナ対策
プログラム・旗部	<ol style="list-style-type: none"> ①旗の作成 ②プログラム編成 ③プログラムの作成

あるが、その後、準備状況に応じて具体的な内容が変化している。以下では、表4をもとに、自治活動の内容およびその活動状況の概要を整理する。

実行委員会（全6名）は、他の組織に先立ち最初に設置されたため、様々な役割を担当している。①行事の名前の募集・決定は、運動会が市全体で中止になったことから、異なる名称をつけるために内容化された。②マスコットキャラクターの募集・作成は、自分たちで創造した運動会の象徴になると考え内容化された。アンケートで募集し、名称と関連するマスコットキャラクターを検討している。③テーマの検討は、重要事項なため、児童会をサポートするために内容化された。④新聞の発行は、6年生中心で活動するため、下級生への進捗状況や連絡事項の伝達方法として内容化された。新聞は、運動会当日までに7回発行されている。⑤全校生競技・演技や6年生競技のスケジュール管理は、運動会の準備が円滑に実施できるよう進行状況を確認するために内容化された。⑥1～5年生の競技内容と放送原稿

の依頼・回収は、運動会の準備が円滑に実施できるよう内容化された。事前に競技図と放送原稿の記入用紙を作成し、各学年に期日までに作成を依頼し、回収している。⑦校長・職員交渉は、6年生だけでは決定できない事柄について、承認をえたり、要望したりするために内容化された。具体的には、運動会開催要望、行事の名称決定報告、キャラクター募集アンケートの許可申請、新聞発行許可申請、事後アンケート実施要望などである。⑧選手宣誓は、例年同様に選手宣誓の内容を検討するために内容化された。このように、実行委員会は、運動会の特徴づくりや、全体の進捗状況を発信・管理する役割を担っており、中心的な組織として活動している。

児童会（全6名）の活動は、例年の活動に依拠して内容化している。①テーマの募集・検討と決定は、テーマ案をアンケートで募集し、意見をもとにテーマを検討、決定している。②開会式及び閉会式の企画・運営・司会は、開閉会式の内容を企画し、当日の運営・司会を実施している。③応援合戦の検討と決定は、縦割りチームに応援合戦の内容と使用曲を期日までに決定するよう依頼し、感染予防対策を協議の上、最終決定している。

6年生競技部（全4名）の活動は、例年の活動に依拠して、①6年生競技の決定、②練習内容の検討、③道具等の準備（校長交渉を含む）を内容化している。主に地域や保護者を元気づけることを意図して、親子競技の内容を検討している。親子競技は、C小学校で慣習的に実施されていたもので、おおよそ、一輪車走（保護者が子どもを一輪車に乗せて運搬する）、パン食い、2人3脚、飴食いの内容としていた。しかし、今年度は感染予防対策をするため、それぞれの実施形態を工夫するとともに、接触や密を回避できない2人3脚を変更し、子どもによる保護者の似顔絵描画に決定している。食品を使用するため、学校長に許可を申請している。競技内容は実際に試走し、感染予防対策をふくめ、円滑に競技が実施できるように、使用する道具や手袋を渡す位置、競技の距離などに問題はないか協議し、最終調整している。

全校生演技部（全4名）の活動は、例年の活動に依拠して、①全校生演技の決定、②練習内容の検討、③道具等の準備を内容化している。全校生演技は、高学年が中学年の頃に経験しており、短期間の練習でよいことや下級生へ指導できること、そして接触

を回避し、隊形移動を少なくできることから、協議の結果、南中ソーランに決定している。後日、各学年の担任にも確認をし、承諾をえたため、最終決定となる。具体的な活動としては、全校生演技部のメンバーが演技内容を練習して、見本を動画撮影し、各学年に配布している。各学年には、映像を視聴しながら練習するよう依頼している。また、1～3年生は理解が不十分になることを考慮し、全校生演技部で指導している。指導形態も協議し、1～2年生には全体の指導を教師が担当し、個々のグループで、縦割班の6年生がサポートするよう調整した。また、3年生には全校生演技部のメンバーで全体的な指導を実施した。その後、低学年から立ち位置を理解したいと要望をうけ、6年生が、全校生演技から閉会式までの合同通し練習の予定を立てた。

全校生競技部（全3名）の活動は、例年の活動に依拠して、①全校生競技の決定、②練習内容の検討、③道具等の準備を内容化している。全校生競技は、協議の結果、例年実施されていた玉入れとなった。しかし、その実施形態では感染予防対策が必要となり、試行錯誤している。最初は競技中の立ち位置を学年ごとで区別する案が提案された。その後、全校生競技部から6年生で試験的に実施してみたいと要望をだし、実施した際、一番遠方にいる6年生がなかなか入らず、盛り上がりにかけてしまった。そこで、別の方法を協議し、その中で教員が助言し、最終的に各チームで1～3年と4～6年で競技時間を区別することとなった。また、共有物からの感染予防のために、各チームにおける玉の用意および片付け時間も競技化している。

コロナ対策部（全7名）は、2020年度の情勢をふまえ、新たに新設されたものである。①コロナ学習の全校発表は、事前に運動会での感染予防対策の意識を高めるために内容化された。当初、コロナ学習をふまえ、感染予防対策を劇で紹介することが提案されていた。しかし、全校生で視聴する際、座席も遠くなるため、劇中での提示資料を全員が十分に確認できないことや密集を回避できないことを考慮し、学習動画を作成し、視聴してもらうことになる。②当日のコロナ対策は、当日の具体的な感染予防対策を決定するために内容化されている。まず、運動会当日、密集を回避するため、どこに消毒を配置し、どのような経路で消毒・手洗いをしてもらうかを検討している。競技後が特に問題となり、当初、手洗

い場に白線をひいて整列させることが提案されたが、やはり密が回避できないことが課題となる。そこで、児童が待機するテントの後ろに消毒液を配置したり、全校生競技は事前にウェットティッシュを配布して対応したりすることにしている。また、コロナ対策部員の誰を、いつ、どこに配置し、密接・密集回避や手洗い・消毒の注意喚起、競技中の消毒作業をするか考えている。当初、十分に競技の情報収集をしていなかったため、運動会開催間近における6年生全体での協議で、「そもそも競技内容の理解が曖昧なのに、コロナ対策ができるとは思わない」という意見がでてしまい、急遽差し戻しとなった。その日の放課後、各担任や担当に競技内容を確認し、各競技における感染予防対策を具体的に検討している。また、人員不足も判明したため、教師の助言をうけて、プログラム・旗部や実行委員会にも強力を依頼している。なお、コロナ対策部員として活動する人をわかりやすくするため、「コロナ対策部」と役割名が表記された段ボールのプレートを首からぶらさげることになっている。さらに、当日の開会式でどのような内容の注意喚起をするのか検討している。③準備品の校長交渉は、感染予防対策で必要だと考えた消毒液やウェットティッシュなどの備品を準備してもらうよう交渉するために内容化されている。

プログラム・旗部（全5名）の活動は、まず、例年の活動に依拠して、①旗の作成を内容化している。これまでの運動会では、例年同様の旗を使用し、その旗を入場行進のときに児童会代表がもち、その後本部に掲揚されることが慣例であった。旗の掲揚は、運動会開催の象徴となる役割をもっていた。そこで、今年度は代替運動会となることから、旗も新しく作成することになる。当初、協議の中でマスコットキャラクターを旗に描画することになった。しかし、児童会がテーマを旗に記載してもらいたいと要望する。部内で協議した結果、5年生が作成するテーマの垂れ幕を校舎の上階からおろすことになっていたことを理由として、マスコットキャラクターを優先することになる。また、旗の作成は8月に終了するため、プログラム・旗部を制作担当として位置づけ、②プログラム編成、③プログラムの作成が内容化されている。担当教員（6年生特別支援学級担当教員）と一緒にプログラムの順番を考えている。

3. 自治活動における学習経験

(1) 意見の不一致と問題解決

以上のように、各会・部においては、例年の形式を参照しながらも、それらを新しいものに創り変えるようにすることで、それぞれで決定すべき事柄が位置づけられている。それにより、各会・部においては、自分たちで決定すべき事柄についての多様な意見が生まれ、自治活動の課題に直面している。また、経過からは、提案内容の課題が指摘され、何度も協議を重ねながら修正されていったことが把握できる。

運動会後のまとめの感想文には、子どもたちがそれぞれの役割の中で、多様な意見を交流し、意見の不一致が生まれ、解決に時間がかかったことが記載されている。例えば、コロナ対策部にいた子どもは、次のような感想文を記述している。

ある日、いつもみたいに話し合いをしていると、いつもみたいに意見が分かれた。時々あるケンカになった。ぼくはとても腹がたった。…そんなとき、ぼくの間にGさんが立った。…Gさんが「やめっ!」と一言。その場はおさまった。そのあと、普通に作業をしていたが、実はずっと考えていた。「いつもケンカばかりしている」みんなだまって作業をしている。「なぜこんなにケンカばかりするのか?」D祭のため、下級生のために自分なりに必死で考える。コロナ対策部にはそんな人しかいないということに気づいた。みんなのために全力をつくす。そんな人しかいないコロナ対策部は最高のチームだと思った。

この感想文からは、自分たちで企画・運営する過程で、子ども同士の意見の対立が生起していること、そして、D祭を創り上げようとする仲間の想いに気づき、前向きに活動しようとする子どもの姿が把握できる。自治活動の過程では、様々な場面でこのような意見の対立やめ事がうまれており、その問題解決過程で、子ども同士の相互理解や集団性が高まり、自治活動への意欲が向上していったことが推測できる。

(2) 責任ある活動

また、運動会後のまとめの感想文からは、自治活動の過程で、下級生に競技内容を説明したり、全校生演技を指導したり、校長交渉したりと、責任ある活動場面が印象的であったことがうかがえる。たと

えば、全校生競技部や全校生演技部を担当した子どもは、次のような感想文を記述している。

玉入れ練習の前の日のこと。説明や確認ができていなかった。明日は玉入れ練習なので、「やばい」と思った。…次の日、みんなよりも早く学校にきた。…太鼓の用意、バケツの用意などをして…。…もう一人の子と協力しながら説明をした。質問もされた。その質問の中では、難しい内容もあった。でも、もう一人の子と協力して発言をした。このくり返しだった。こたえていくうちに、みんなが理解していった。リーダーとしてがんばれたと思う。このとき、達成感がすごかった。私はふだんはリーダーにならないので難しかった。でも、リーダーになると達成感が感じられるし、説得力などもつく。このとき、リーダーになってよかったと感じた。

私は体育館で3年生達に南中ソーランの踊り方を教えなきゃいけない。そこで、私に大きな壁が立ちました。それは、教える際にマイクでわかりやすく説明するという内容だった。脳裏で「絶対無理だろ。」と「でも、完ぺきに南中ソーランを仕上げたいし。」という二つの思いがあった。当日、緊張の中、頭にうかんでいる計画的な説明と自信、これがあるからにはいける!と思った。しかし、それもつかの間、いざ自分の出番となると困惑で計画的な説明がくずれて忘れかけようとしている。また、「聞こえているかな?」という不安がめぐる。やっとのことで自分の出番が終わった。

こうした感想文からは、自治活動の中で、子どもたちが人前に立ち、リーダーシップを発揮する場面が印象的であったこと、そして、事前に説明内容や方法を計画するなどの準備をし、当日は緊張感を感じながら、なんとかやり遂げている様子が把握できる。こうした責任ある活動を経験する中で、達成感を獲得し、運動会を自分たちでつくりあげていることを実感していると考えられる。

(3) 他者からの学び

さらに、運動会後のまとめの感想文からは、責任ある活動を遂行する過程で、友達の活動から学んでいる様子がうかがえる。たとえば、全校生演技部を担当する子どもは、次のような感想文を記述している。

みんなの背中が大きく見えた瞬間、それは、3年生に必死に南中ソーランを教えているのを見てそう思った。どのチームも工夫して教えていると思った。そのとき、いい思いと「ぼくの教え方が悪い」というくそーという思いが生まれた。けど、いい思いの方が勝ちました。「よし、もっとわかりやすく教えるぞ!」という思いで、必死にわかりやすい説明を考えた。…黄色チームの教え方がすごく印象に残っています。一人一人について、残った2人が前でお手本となっておどっているのは「うわー、あんな一瞬でここまで考えて行動にうつせるんだな。」と思った。

この子どもの感想文からは、下級生にわかりやすく指導するための説明方法を検討していたこと、また、よりよい方法を実施する友達の様子を驚いていたことが把握できる。このように、教師の支援が少ない自治活動では、友達の活動が比較対象や関心事となりやすく、そこから自分の活動を振り返る機会が生まれると考えられる。全校生演技部を担当した別の子どもも、黄色チームの指導をみて、「もっと教えられたらよかったと思ったし、計画を立てたらよかったと思った」と感想文に記述しており、子ども同士の相互作用によって自治活動の学びが深まっていると考えられる。

4. 自治活動の背景にある連携体制

(1) C小学校における連携体制

E教諭が職員会議で子ども主体の運動会を提案した際に、できるだけ子どもたちで企画・運営することを方針として提示していた。そのため、C小学校全体で運動会のねらいや指導のあり方が共有されていた。なお、こうしたねらいの共有を円滑にする上で、運動会開催の前年度にE教諭が設置した「体育部会」が有効に機能したという。これまで、C小学校では、体育的行事は体育担当が1人で構想を立て、それを直接職員会議で提案していた。しかし、それでは、体育担当が変更された時に行事の性質も大きく変化してしまうことや、教職員の合意形成が不十分となりやすいこと、そして、会議の時間が長くなりやすいことが問題となった。そこで、E教諭は、低学年、中学年、高学年担任からそれぞれ1人を選出し、そこに管理職と養護教諭が加わった体育部会の設置を提案し、承認されている。これにより、運動会についての提案や進行方向については、体育部会での議論を一度通すことになり、そこで、各学

年担当者に運動会の方針や具体的な指導の方法について最初に共通理解が図られることとなった。こうした背景もあり、運動会づくりの情報共有が円滑になっていた。

子どもたちの自治活動は、基本的にE教諭の指導の下で実施されたため、一貫して教職員の連携的な指導がなされていたわけではない。しかし、E教諭は、子どもたちが、各学年担任に競技内容の検討を依頼する時や、校長交渉をする時、事後アンケート実施を依頼する時など、他の教職員が関与する場面では、できるだけ事前に予告し、連携の要望をしていた。連携の要望の具体的な内容は、その依頼が問題のあるものや応えられないものである時は、直接的に子どもに伝えてほしいということや、子どもに依頼内容やその意図を質問し、できるだけ子どもが考えていることを掘り下げ、表現させてほしいということ、そして、時に壁となって不十分な点を指摘し、「考えている通りに必ずしもいくわけではないこと」を突きつけてほしいということであった。この他にも、全校生演技部やプログラム・旗部に関与する教員には、「話し合いの時に教員が提案してもよいが、最終的な決定権は子どもに委ねてほしい」と要望していた。このように、E教諭は、他の教職員が関与する場面では、子どもの主体性をひきだすための教師の指導方法について要望し、できるだけ連携体制がとれるように意識していた。E教諭は、「子どもたちが自分たちでやっていることだけに満足するのではなく、不十分な点を教師の指摘によって明確にすることで、再度子どもたちが考えるようにし、子どもが主体的に活動できるようにしたい」と考えていた。

(2) 運動会後の感想文から

実行委員会を担当した子どもによる運動会後の感想文には、教職員の連携の様子が提示されている。感想文には、教職員へD祭を次年度に引き継ぐための事後アンケートの実施依頼の様子が記述されている。

まず、H先生が手を挙げた。僕の頭の中では、G先生とI先生から質問がくることはわかっていた。いくつかの質問のあと、ついにI先生が手を挙げた。I先生は、「なぜ、あなたたちは実行委員になったのですか」と聞いてきた。ほくはあせりながらも、「企画力や運営力などの力がつくから」と言った。これで終わりかと思ったら、次はこう言われた。「企画力や運営力をつけるのに、なぜD祭じゃないといけないのか」ほくはとまどいをかくせず、少しだまりこんでしまった。「この質問をどう答えたらいいんだろう。」考えがまとまらないまま、ほくはしゃべりだした。「D祭というのは運動会の代わりだから・・・学校で一番大きい行事は運動会だと思うから・・・大きい行事だから・・・企画力や運営力がいっぱいつくからです。」そのときは立ってられないくらいで、泣きそうになったけど、職員室にいるときは頑張ろうと思った。このあと、自分でよく頑張ったなと思った。

この感想文の中で、5年生担任のI教諭が、なぜD祭を引き継ぐ必要があるのか、その意義を問うている場面が提示されている。教師が意図的に子どもの壁となり、内省的な思考を深めようとしている。子どもは多くの教職員を前にして緊張しながらも懸命に自分の言葉を紡ぎだそうとしている様子が把握できる。この場面に象徴的にあらわれているように、E教諭だけではなく、C小学校全体で子どもたちの自治的な運営能力を高めるよう連携した指導がなされていたと考えられる。

(3) 家庭での相談や励まし

運動会後のまとめの感想文では、子どもたちが自分たちで企画・運営する際、家庭での支援を受けていたことが把握できる。例えば、次のような感想文がある。

…お母さんが帰ってきて、「何してるの?」と言ってきて、「玉入れの説明を考えてるよ」と言うと、「すごいね。玉入れ期待してるよ」と言ってくれた。私はこの言葉で心に火がついたのか、もっとやる気になった。やるはずのなかった曲や玉入れの名前まで決めた。色んなことを考えることができて、とてもうれしかった。お母さんの言葉がなければ、きっと説明しか考えなくて、もしかしたら間に合わなかったかもしれないからよかったと思った。…学校でJさんとKさんに説明を見せると、とても喜んでくれた。私は2人に喜んでもらえてよかったと思った。玉入れの名前は私が考えた「空にむけて4つの玉」になった。本当にお母さんに感謝している。心に火がつくこともやる気になることもなかったかもしれない。家で説明を考えてよかったと思った。

お母さんと一緒にご飯を食べていたとき、「D祭順調?」と聞かれ、ほくは「まあまあ順調だよ」ということから話がはじまりました。…「(職場で開催する子どもを対象にした行事について; 筆者追記) お母さんの方は何人ぐらいこられるの」と聞くと、「2人しか来られないようにしている」と言っていたので、ほくは参考にしようかなと思いました。次に「どんな対策しているの」と聞くと、「絶対に手洗いと消毒をさせるようにするのと、並ぶときには間隔をあけるようにする」と言ってくれたので、D祭当日に全てを実行しました。

ほくは児童会です。C小学校の顔でないといけません。…先生から、自分の思いを全校生に言っただけと言われてきたとき、とてもうれしかったです。お母さんからも、「それだけ期待されているんだよ!!!」と言われました。考えていると、「期待」という文字とD祭のことで、頭の中が回らなくなりました。「期待されている」と言うたった2文字の重みがとても伝わってきて、鉛筆が進みませんでしたが、ようやく書き上げました。お母さんから、「児童会で、良いことしても目立つし、悪いことしても目立つから、期待に応えろよ」と言われました。それを聞いて、ほくは児童代表という言葉がとても大切だなと思いました。児童代表としてはずかしいことをしないようにしたいと思いました。

上述の感想文からは、児童が悩んでいる時や緊張している時に家庭で保護者が励ましたり、情報を提供したり、相談にのって一緒に考えたりしていることが把握できる。E教諭の自治指導では、家庭で運動会について会話することが意図的に働きかけられていた。実際に子どもたちは、学校では自分たちで考えなければならないため、家庭で保護者を頼り、様々な支援を受けていたことが示唆される。

Ⅵ 運動会で意志表明されたこと

1. 意志をテーマにこめる指導の工夫

E教諭は、神谷(2017)の方法論に学びながら、運動会のテーマを子どもたちに決定させている。神谷(2017)は、運動会の事例分析をふまえて、運動会指導の方法を提起している。指導方法においては、運動会指導におけるテーマづくりの重要性に言及しており、「テーマは自治の道標」(神谷, 2017, p.46)だと主張する。神谷(2017)によると、子どもたちがテーマを協議する際、「教師は設定した『ねらい』に含まれた、生活上の願いや意志に気づくように子

どもに働きかけ、それらを含んだテーマを設定させる」(神谷, 2017, p.46) ように指導する。教師は子どもの言葉を引き出しながら、テーマに子どもたちの想いや願いを反映させていく。そして、テーマに内包された子どもたちの想いや願いが、運動会における演技・プログラム、組織・集団、場・環境という3領域に貫徹されることで、運動会が意志表明の場として演出されるという。したがって、運動会指導におけるテーマづくりは、教師の重点的な指導となる。

そこで、E教諭は、全校生の意見が反映されるように、事前に各学年からテーマ案を検討してもらった上で、児童会と実行委員会が合同で協議している。何度も協議を重ねており、その期間は1ヶ月にもおよんでいる。そして、この過程で、E教諭は、子どもたちが考えたことに対して再考させる問いを提示している。E教諭の指導の概要は、以下ようである。

まず、次のような各学年のテーマ案が提出される¹⁾。2年生「みんなで力を合わせる運動会」、3年生「コロナに負けずにがんばろう」「新しい運動会を考えよう」、5年生「コロナに負けるな!! くじけずに立ち向かえ!! C(学校名)っ子」「コロナに負けるな 笑顔あふれる C(学校名)っ子」、6年生「願い・奇跡・創っていった コロナに負けないC(学校名)っ子」。次に、この結果をふまえて、実行委員会・児童会を中心にテーマ案を検討する。その際、E教諭は、「コロナに勝つとは何を意味しているのか」「どうなったら負けることになるのか」「学校から感染者がでたら負けなのか」と問うている。また、「みんなが輝く」「みんなが楽しむ」といった言葉がでてきたときには、「みんなが楽しむとはどういうことか」「走るのが嫌で応援が好きな子は、応援するだけでよいのか」と問うている。他にも「6年生のテーマに奇跡とあるが、運動会を創ることが奇跡なのか」と問うている。こうして、E教諭は、子どもたちに再考させる問いをぶつけながら、子どもたちの表現に内包された具体的な意味を言語化して交流するとともに、テーマにできるだけ子どもたちの想いや願いを具体的、意図的に反映させるように指導している。E教諭はこの指導過程をへて、次第に子どもたちが、「自分たちの生活の課題」や「今、運動会に変わる行事を実施する理由」、「これまでの運動会との差異」に目を向けるようになり、「自分たちだけでなく、学校や保護者への想いを大切にす

る」、「今回がはじまりで、新しい文化にしてもらいたい。自分たちで創るということを受け継いでもらいたい」といった想いが創られたと総括している。

2. テーマで表明された意志

こうした過程を経て、決定されたテーマは「当たり前を大切に いまこそ創ろう ニューカルチャー～ D(地域の名前)祭 2020～」である。テーマに込められた思いは、次のように整理されている。

「これまで当たり前にあったことや生活が、失われた今、これまでの当たり前だったことに目を向け、これからも大切にしていこうとしたい。いま、コロナで運動会や様々な行事がなくなっていったが、こんなときだからこそ、みんなで知恵やアイデアを出し合いながら、新しいかたちのD祭をつくってきたい。また、自分たちだけでなく地域や保護者の人たちも笑顔になってほしい。そして、自分たちがつくったD祭の想いや願いをこれからのC小学校のみんなに受け継いでいってほしい！」(運動会新聞第2号)。

上述したテーマや説明からは、次のような想いがこめられていることが解釈できる。

第1に、「当たり前を大切に」という表現には、新型コロナウイルス感染症予防対策により様々な行事や行動が中止または制限されることで、これまで「当たり前」にできていたことができなくなったことをふまえ、あらためてこれまで「当たり前」にできていたことや、今「当たり前」にできることを大切にしようという想いが表現されている。

第2に、「いまこそ創ろう」という表現には、様々な「当たり前」のことができなくなっている今だからこそ、あきらめたり落ち込んだりするだけではなく、自分たちでできる限りの工夫をして、これまで「当たり前」に実施してきた運動会を創造していこうとする想いが表現されている。

第3に、「ニューカルチャー」という表現には、これまで同様の運動会ではなく、自分たちで新しい運動会をつくり上げることへの強い想いを表現している。同時に、自分たちで創る運動会を学校の伝統行事(カルチャー)として下級生にも受け継いでもらいたいという想いが表現されている。

第4に、副題の「D祭 2020」という表現には、地域の名称をつけ、かつ、お祭りとすることで、運動会に来場する保護者や地域の人にも親しみやすく

し、楽しんでもらいたい、元気になってもらいたいという想いが表現されている。

3. テーマづくりの過程

運動会後の感想文では、実行委員会や児童会を担当した子どもの12名中9名がテーマづくりについて記述しており、テーマづくりで苦労した様子や大きな達成感を味わえたことが把握できる。例えば、次のような感想文がみられる。

…テーマというのはとても難しく、テーマの内容で競技が決まるほどだ。いつも放課後に残って考えた。何日も何日も考えた。先生からもアドバイスをもらったこともあった。夕方ぐらいまで残ったこともあった。帰り道るとき、「なんでこんなに難しいの」と自然に言葉がもれた。「こんな決まるのか」と終わりが全然見えなかった。友達も、とても不安そうな顔だった。でも、Lさんはちがった。Lさんは、絶対できるという思いが顔にうつし出されていた。ほくもその顔を見て、とてもやる気が出た。みんなもつられてやる気になっていた。ついにテーマが決まった。とても達成感があった。ほくは、友達はとても大事だなと思った。もし友達がいなかったら、テーマが考えられなかったと思った。つかれたときの帰り道は、ほくにとってはなぜかほっとする場所だった。

…テーマを決めるうえで、コロナだからいつもとちがう題名だとか、いつも使われているからなど苦戦した。ほくはその時、「早くして〜」と思った。休み時間も考え、放課後も集まって・・・でも「どうすればみんな納得してくれるだろう」と考えるようになっていた。ほくは、「この意見はどう？」となっても、コロナだからなどで使われなかった。全校生のアンケートから意見をとっても、なかなか決まらなくて、「なぜこんなにしても決まらないんだ!」と思った。でも、やっぱり…いつもとはちがうものにしないといけない。「自分たちで考えてD祭をする」と言ったんだから、「こんなことでいやと言ってはいけない!」と感じた。何日もかけてできたのがあのテーマだ。決定して、やっぱり「早く終わって」というのは間違いだったんだ!!となった。ものすごい達成感があふれた。

テーマを決めているときは、早く帰りたいと思っている人や真剣に考えている人がいました。その中でも印象に残っているのは、MさんとLさんが言ったことです。「今、こんな時期だから、できないことが多いから、当たり前を大切という言葉はある」「新しい文化を受け継いでもらうために、ニューカルチャーがいる」

MさんとLさんが言ったことに、集まっていた全員が納得していました。…「創ろう」という漢字もこだわっていました。自分たちで考えて、D祭を完成させるということが、創ろうという漢字にこもっています。児童会からテーマのアンケートをとっていたので、みんなの意見を入れました。D祭には、他の学年の意見もありました。本当にテーマには、たくさんの人の思いがこめられています。

このように、感想文からは、子どもたちが「テーマの内容で競技が決まる」ために、テーマの決定を重要視していたこと、最初はなかなか話し合いが進展せずに放課後も残ってやることになったこと、「早く終わって」「なんでこんなに難しいの」と思っていた子どもたちが仲間の言葉や姿勢に鼓舞されて思い直したこと、「自分たちで考えてD祭をする」という強い決意をもとに、全校生アンケートをふまえて何度も議論を重ね、様々な想いや願いがこめられたテーマになったことが把握できる。「早く終わって」という考えが「間違えだった」、「ものすごい達成感があふれた」、「友達はとても大事だなと思った」という記述にあらわれているように、テーマづくりの過程での苦労は、振り返る中で意味のある経験だったと気づくものとなっている。

4. 開閉会式で表明された意志

E教諭は、神谷(2017)の指導方法論を参照し、上記のテーマに内包された想いや願いを、運動会全体に反映させている。プログラムにおいても、競遊種目を重視し、全学年で表現を実施するなど、観客も楽しめるよう工夫している。また、6年生は親子競技があり、直接保護者と一緒に競技に参加する種目もある。さらに、プログラムを作成する段階で、実行委員会から、各学年にテーマの内容が入ったプログラム名にするよう依頼している。

開閉会式では、児童会や実行委員会が児童代表として、挨拶している。そこでは、運動会開催に関する想いや願いが表明されている。たとえば、開会式の入場行進時の児童会によるアナウンスは、以下の

ような内容であった。

…テーマに込められた想いは、これまで当たり前であったことや生活が失われた今、これまでのことに目を向け、これからも大切にしていこうという強い想い、コロナウイルスで様々な行事がなくなっていたが、こんなときだからこそ、みんなで知恵やアイデアを出し合いながら、新しい形のD祭をつくりたいです。また、自分たちだけではなく、保護者の人たちにも笑顔になるようなD祭にしていこう、そして、自分たちが創ったD祭の想いや願いをこれからも受け継いでほしいという想いがあります。

…色々な行事がなくなりましたが、下を向くだけでなく、こんな時だからこそ前を向いて、自分たちはもちろん、家族や地域の人にも元気を届けたいという想いがD祭に込められています。当たり前が、当たり前でなくなった今、コロナ禍でも全部なくなったわけではありません。色々なことができます。来年も同じ状況になったとしても、5年生のみんなが全校生の代表として、下級生を引っ張って行って欲しいです。先生方と僕たち、一つになって頑張るので、ご協力よろしくをお願いします。

上記と同様の内容が、その後の児童会代表挨拶、選手宣誓でも語られている。また、閉会式では、D祭を来年度も継続実施してもらうために、5年生への「引き継ぎ式」を開催している。引き継ぎ式では、以下のような児童会からの説明があった。

僕たちはこのD祭をつくりあげ、5年生に引き継いでほしいとおもいます。テーマにもある通り、ニューカルチャーとは新しい文化という意味です。この新しい文化は今しかつくれなかったもの、C(学校名)の伝統として残していきたいのです。…今から旗を渡したいとおもいます。旗を渡すというのは引き継ぐという思いがこめられています。

このように、開閉会式では、テーマに込められた想いや願いを代表者が表明したり、具体的な形にしたりするための内容が構成されている。

Ⅶ 保健学習の概要

1. 実践の経過

運動会開催で重要な課題は、新型コロナウイルス感染症の予防対策を自分たちで考えることであった。そのため、E教諭は、コロナ学習の目標の1つを、「運動会を開催することに、地域の人や保護者に賛

成してもらえるように、コロナに関する知識をつけ(科学的知識)、運動会実施にあたっての感染対策を考える」としている。コロナ学習は、全7時間実施しているが、そのうち、上記の目標と関連するところは、前半の3時間分となっている。後半は、子どもの関心にもとづいて構成され、医療現場の実態や風評被害、励ますための市民運動、感染症に罹患した患者の困難やその中で何を思ったのかなど、患者の生活や新型コロナウイルス感染症がもたらした社会問題を学習対象にしている。以下では、前半に焦点をあて、その特徴を検討する。

1時間目(7月7日)は、導入として、新型コロナウイルス感染症についての思いを交流した後で、「マスクはなぜ必要なのか」「コロナとはどのような病気か」、また、政府によるコロナ対策や最初に発症した国に責任を押しつける事例などを話し合っている。その中で、新型コロナウイルス感染症に関連する様々な疑問を把握し、単元の構想を立てている。

2時間目(7月15日)は、健康教育を長年にわたり探求してきた、元小学校教諭による遠隔授業であった。その内容は、次のようなものであった。

- ①ウイルスの性質(細胞破壊・増殖・大きさ・感染経路・感染の仕組み・細菌との相違点・生存時間)。
- ②免疫の性質(白血球による免疫機能・抗体の生成・健康と免疫機能・免疫機能の発育)。
- ③新型コロナウイルス感染症の特徴(免疫細胞をかわし無症状でも増殖する、肺炎になる仕組み、無症状や重傷者の割合、過去の感染症の事例紹介)。
- ④発問「子どもは免疫機能が高いから気にしなくてよいか」「ウイルスはマスクの穴より小さいけれど、マスクはつけるべきか」と相互交流。
- ⑤マスクの機能(自分がうつらないため、人にうつさないため、高齢者や持病のある人を守るため、病院で働いている人やその家族を守るため)。
- ⑥手洗い・消毒の機能(洗い流したり、ウイルスの外側の油膜を溶かしたりする)や、ウイルスが生存しやすい環境(銅・段ボール・プラスチック・ステンレス etc)を理解した手洗いの方法。
- ⑦学校での感染予防対策(手洗い・消毒・マスク着用・3密回避・頻繁に水分補給・免疫力を高める)。

3時間目(7月29日)は、2020年7月4日に放送されたNHK番組「人体VSコロナウイルス」を視聴している。その内容は、免疫機能や新型コロナウイルス感染症の特徴や症状などの、より科学的な内容を解説するものであった。

以上のように、E教諭は、導入で子どもたちの新型コロナウイルス感染症に関連する疑問を整理し、その後、2・3時間目でウイルスや免疫の仕組み、そしてそれらをふまえた感染予防対策の基礎的・発展的内容を学習させている。これにより、方法だけではなく、その理由をふまえ、感染予防対策を推進することができるよう意図している。

2. 運動会におけるコロナ対策の内容

6年生は、運動会づくりのための各部に所属しており、そこで競技内容を検討する際、コロナ学習をふまえた感染予防対策を検討することになる。また、各部の途中経過を報告する機会を定期的に設定することで、全体で感染予防対策について検討している。さらに、各学年競技については、コロナ対策部が競技中の感染予防対策を検討し、当日には消毒や3密回避のための注意喚起などを実施している。こうして、感染予防対策について、相互交流したり、専門的に検討する役割をつくったりすることで、運動会全体にコロナ対策を導入することがねらわれている。

運動会づくりにおけるコロナ対策は、表5のように、大きく【手洗い・消毒】、【3密回避】、【事前学習】、【当日の注意喚起】の4つとなっている。これらの方法には、ウイルスの特性や感染経路、感染予防対策などのコロナ学習の成果が生かされている。たとえば、【手洗い・消毒】においては、「ウイルスに接触した手で鼻や目や口を触ることが、主な感染経路である」という学習をふまえ、競技前後での手洗いや消毒、競技中での接触回避（非接触型競技の選択、リレーでの手袋etc）を実施している。また、飛沫感染や「ウイルスが付着しやすい場所は乾燥しやすい場所である」という学習をふまえ、マイクの消毒や競技中での一輪車の持ち手の消毒は、ウェットティッシュを使用して入念に実施している。【事前学習】についても、下級生のために、運動会新聞で感染予防対策を周知したり、コロナ学習をまとめた動画を作成・配信したりしている。まとめ動画の内容は、①飛沫感染の仕組み、②感染後のウイルスの増殖、③からだを守る免疫の仕組み、④感染後の症状、⑤新型コロナウイルス感染症の増殖率についてであり、感染予防対策の必要性や行動を喚起する内容となっている。コロナ対策部が開会式で実施した【注意喚起】は、マスクの着脱（競技中ははずしてよいが余計な話はしない）、道具の消毒（コロナ

表5. C小学校の運動会における感染予防対策

対策	具体的な対策
手洗い・消毒	<ul style="list-style-type: none"> ○種目内容は、非接触型のものを選択し、なるべく物や道具を共有しないようにする（リレーは手袋を使用etc）。 ○使用する道具は、使用前後に消毒作業をする。特に、道具の鉄やプラスチック部分には菌が付着しやすいため、除菌シートで消毒作業をする（マイク、一輪車の持ち手etc）。 ○全学年競技では道具の共有をするため、1人1枚除菌シートを配布し、競技後に消毒する。
3密回避（密閉・密集・密接）	<ul style="list-style-type: none"> ○プログラムの競技・演技場面、移動場面、整列・待機場面で3密を回避する。 ○手洗い・消毒場面、児童テントでの待機場面などでの3密を回避する。 ○保護者テントなし、保護者と児童で利用するトイレを区別し、3密を回避する。
事前学習	<ul style="list-style-type: none"> ○6年生は事前に新型コロナウイルスの特徴について授業で学習をする。3～5年生もこの授業を視聴する。 ○6年生（コロナ対策部）が作成した学習発表の動画を3～5年生で視聴する。 ○事前に運動会通信を通して感染防止対策の方法について案内する。
当日の注意喚起	<ul style="list-style-type: none"> ○当日に密集・密接を回避するように注意喚起する（コロナ対策部担当）。 ○当日に競技前後に手洗い・消毒をするように注意喚起する（コロナ対策部担当）。

対策部のテントで消毒するため、競技後にもってくる）、手の消毒（各テントの後ろに消毒液を1つ配置。競技後・トイレ後には必ず利用する）、トイレの利用（児童は校舎内、保護者は校舎外を利用する）、ウェットティッシュの利用（全校生演技後に利用し、所定の袋に破棄する）、手洗い（校舎内と外の手洗い場を利用して競技後に必ず手洗いをする。2m間隔をあけるようコロナ対策部員が注意喚起する）についてであった。運動会の参加者に対して、どのタイミングでどの手洗い場・消毒液を実施するのかを明確にして、具体的な感染予防対策について注意喚起することができている。こうして、C小学校の運動会づくりにおいては、保健学習を実施し、それを、運動会づくりで適用・応用するという発展的な学習となっている。

VIII. アンケートおよびインタビュー調査の結果と考察

1. 自治的活動について

(1) アンケート結果

運動会開催の是非については、次のような結果と

なった。6年生(35名)へのアンケートでは、「『D祭』は楽しかったですか」という質問について、34名が「そう思う」、1名が「少しそう思う」と回答している。「『D祭』をつくることに積極的に取り組みましたか」という質問について、29名が「そう思う」、6名が「少しそう思う」と回答している。「自分たちで『D祭』をつくることができましたか」という質問について、31名が「そう思う」、4名が「少しそう思う」と回答している。また、保護者(34名)へのアンケートでは、「D祭が開催されて良かったと思いますか」という質問について、34名全員が「そう思う」と回答した。教職員(17名)への6年生による事後アンケートでは、「D祭はどうでしたか?」という質問について、10名が「すごく良かった」、7名が「良かった」と回答している。

6年生へのアンケートでは、「自分の役割で、考えるのに難しかったことや、うまくいかなかったことは何ですか」という質問について、表6のようになった。結果、「テーマ決定(11)」「コロナ対策(7)」「意見の一致(6)」「考えたことの説明や質疑応答(6)」「旗の制作(3)」「下級生への演技指導(3)」「考えても不十分なことがある(2)」「新聞づくり(2)」「全校生アンケート(1)」「開会式の司会(1)」「競技・演技の準備(1)」「競技演技の準備(1)」「競技内容の検討(1)」「プログラムの制作(1)」「演出の検討(1)」「競技内容の検討(1)」「活動への参加(1)」があげられた。

教職員へのアンケートでは、「子どもの自主性を育てる上で、うまくいったことと課題(困ったこと、難しかったことなど)はありましたか」という質問について、表7のようになった。

《教師(16)》についての回答は、次のようになった。【成果(7)】は、「主体性をひきだす教師の指導(5)」「異学年交流(1)」「教師の学び(1)」となった。【課題(9)】は、「主体性をひきだす教師の指導(4)」「教員の連携体制(2)」「他学年との協力関係(1)」「意識の引き継ぎ(1)」「来年度の準備(1)」となった。

《子ども(22)》についての回答は、次のようになった。【成果(20)】は、「主体的な学びやその成果(10)」「協同的な学びやその成果(4)」「高学年としての意識(1)」「組織体制(1)」「下級生の支援(1)」「下級生への影響(1)」「下級生への情報発信(1)」「5年生の達成感、成就感(1)」「課題(2)」「課題の困難さ(1)」「主体性をひきだす教師の指導(1)」となった。

表6. 6年生への自治活動に関するアンケート結果

カテゴリ	コード
テーマ決定(11)	内容に関係するため、みんなが納得するテーマにしななければならなかった(1)
	「コロナ」をいれるか、「コロナに負けるや勝つ」の意味など、難しかった(1)
	「コロナ」をいれると悲しむ人がいるかもしれないと悩んだ。「負けるな」はどうしたら勝ちなのか悩んだ(1)
	いつもと異なり「協力」などの言葉が使えず、言葉をうまくつなげることができなかった(1)
	テーマ決めが考えるのが難しかった(1)
	アンケート結果からでてきた「コロナ」という言葉をいれると、身内に罹患者がいると嫌な気持ちになるかもしれないという意見と今年っぽいという意見がでてうまくいかなかった(1)
	いつもと異なり様々な言葉がでてまとめられず、限られた時間の中で緊張してうまくいかなかった(1)
	いつもと異なるテーマで苦戦した(1)
	児童会と考えたが難しかった(1)
	テーマが内容を決めるのが難しい。「コロナ」という言葉をいれるかでたくさん議論した(1)
	みんなで話し合いなかなか決まらなかった(1)
コロナ対策(7)	コロナ対策を考えるのが難しい(1)
	消毒の数を考えるのが難しかった(1)
	全校生競技を試してみたときに密を回避できなかったこと(1)
	競技における細かいコロナ対策を考えること(1)
	間隔をあげるための指示が何回も言わないといけなかった(1)
意見の一致(6)	低学年に間隔をあげる指示が難しかった(1)
	消毒液がある場所で密になった(1)
	旗のデザインで意見がバラバラになり時間がかかった(2)
考えたことの説明や質疑応答(6)	全員の意見を一致させること(1)
	全体的に意見の相違がありうまくいかなかったことがあった(1)
	話し合いで意見に相違がでたときの解決(1)
	実行委員会6人の意見をふまえて選手宣誓の内容を決めること
	決定事項をわかりやすく説明するための準備(1)
	玉入れで考えたことを伝えるのが難しく、質問もたくさんでて回答が難しかった(1)
旗の制作(3)	玉入れの説明がうまくいかなかった(1)
	発表の時の疑問に答えるとき(1)
	みんなの前で決まったことを発表するときに質問がきて、回答に困った(1)
下級生への演技指導(3)	職員会議での説明があまりうまくいかなかった
	旗が大きいので制作が大変だった(1)
	旗をテーマに合った色合いにすること(1)
考えても不十分なことがある(2)	丁寧に色を塗る作業が難しかった(1)
	1〜5年生を並べせたり、時間内に教えるのが難しかった(1)
新聞づくり(2)	3年生に教えるのが難しかった。マイクをもって教えるのが緊張した(1)
	3年生への演技を教える時に自分たちでしたから難しかった(1)
全校生アンケート(1)	うまく考えたつもりでもまちがっていたりした(1)
	コロナ対策を考えても担当の先生に聞いたらまだ考えなければならぬことがよくあり難しかった(1)
開会式の司会(1)	新聞の内容がなかなか決められなかった(2)
	アンケートを全校生にとり、まとめること(1)
競技・演技の準備(1)	開会式の司会が緊張してうまくできなかった(1)
	全校生演技のハッピー教を教えることや演技の配置を考えるのが難しかった(1)
競技演技の準備(1)	競技演技の準備(1) 玉入れの練習があまりうまくいかなかった(1)
	競技内容の検討(1) 玉入れの名前を考えるのが難しかった(1)
プログラムの制作(1)	競技と競遊のバランスのよいプログラムづくり(1)
	競技の内容でプログラムの順番を決めるのが難しかった(1)
演出の検討(1)	曲決めが難しかった(1)
	競技内容の検討(1) 時間内におさまるための競技の工夫が難しかった(1)
活動への参加(1)	話についていけなかったり、まかせてしまった(1)

(2) 考察

6年生の全員が、運動会づくりに積極的に活動し、自分たちで運動会をつくりあげたという実感や、その成果に満足感をもっていることが示唆される。保護者や教職員も運動会の開催を肯定的に評価する結果となっている。

また、子どもたちは、それぞれの役割における課題に直面していることが示唆される。中でも全体を通してあげられたのが、「意見の一致」についての困り感であった。これまでとは異なる運動会を、自

表7. 教職員への自治指導に関するアンケート結果

対象	成果 or 課題	カテゴリー	コード	
教師 (16)	成果 (7)	主体性をひきだす教師の指導(5)	時間がかかる話し合いの見守り(1)	
			教員の助言、働きかけがよかった(1)	
			練習時間を短縮できた(1)	
			できるだけ自分たちで決めさせた(1)	
			競技内容を子どもが相談しながら完成させていた(1)	
	異学年交流(1)	他学年との交流がほとんどなかったため、よい刺激となった(1)		
	教師の学び(1)	子どもの可能性を信じることの大切さを学んだ(1)		
	課題 (9)	主体性をひきだす教師の指導(4)	低学年への指導は教師主導となってしまった(1)	
			どこまで手をいれるか判断が難しかった(1)	
			子どもを待つ時間のバランス(1)	
運動会後、他の活動への自主性を育成する指導の広がりが(1)				
教員の連携体制(2)			6年担任の負担が大きい(2)	
他学年との協力関係(1)	他学年の協力したい気持ちを実現できなかった(1)			
意識の引き継ぎ(1)	異動された教員の意識変革や意識の引き継ぎ(1)			
来年度の準備(1)	来年度の開催時期の検討(1)			
子ども (22)	成果 (20)	主体的な学びやその成果(10)	主体的にやったことによる自信や成長(2)	
			自分たちで考え、責任をもってやっていた(2)	
			目的意識をもって行動できた(1)	
			自分で考えて動くことを学んだ(1)	
			教師側を急がせる程に主体的に動いていた(1)	
			自分たちで考えたことで楽しめた(1)	
			子どもが組織や活動内容を考えたこと(1)	
			「自分たちでつくった」意識が達成感を高めた(1)	
			協力、団結する力がついた(1)	
			全児童が一つの目標に向かい頑張った(1)	
	話し合いを重ねることで各グループの仕事ができてきた(1)			
	課題 (2)	主体性をひきだす教師の指導(1)	自主性に任せすぎて、介入するタイミングが遅れた(1)	
			協同的な学びやその成果(4)	企画・運営の様々な困難に対して、知恵やアイデアを出し合い解決する姿に確かな学力の育成を実感した(1)
			高学年としての意識(1)	高学年としての意識やモチベーションの高揚(1)
			組織体制(1)	実行委員会の整備(1)
下級生の支援(1)			DVDを作成したことで各学年で練習できた(1)	
下級生への影響(1)	6年生の姿をみて下級生も一生懸命ついてきた(1)			
下級生への情報発信(1)	新聞づくりで全校生へ発信したのがよかった(1)			
5年生の達成感、成就感(1)	計画を全校生の前で実施し、6年生の手伝いをできた(1)			
課題の困難さ(1)	大変であった、難しかったという感想の子もいた(1)			

分たちで創造するため、多様な意見を一致させることに時間をかけたことが把握できる。自分たちで競技内容や形式を検討した結果を、他者に説明することや、そこで質疑応答することも困り感が大きかったようである。自身はうまく考えたつもりでも、他者からの意見をふまえると、まだまだ課題があることを突きつけられた経験をしており、これらは、自治的な学習によって生じた子どもたちの問題解決の場面となっている。

教職員の実感からも、今回の運動会で子どもたちの主体性が発揮され、目的意識や責任感、協力を心をもって活動し、その結果、達成感や自信をつけたことが示唆される。他方で、教師は、子どもの主体性をひきだす上で、どこまで子どもに委ね、どこから指導するかを悩みながら指導していたことが示唆される。また、次年度に向けて役割の分担や引き継ぎが課題になると考えている。

2. テーマについて

(1) アンケート結果

6年生へのアンケート結果は、次のようであった。「自分たちのテーマを運動会で表現することができ

ましたか」という質問について、24名が「そう思う」、10名が「少しそう思う」、1名が「少し違うと思う」と回答した。「自分たちのテーマは参加者（保護者・地域の人）に伝わったと思いますか」という質問について、27名が「そう思う」、7名が「少しそう思う」、1名が「少し違うと思う」と回答した。「D祭で決めたテーマはこれでよかったと思いますか」という質問について、34名が「そう思う」、1名が「少しそう思う」と回答した。

教職員への6年生による事後アンケートでは、「テーマについてどう思いますか」という質問について、表8のようになった。【成果 (15)】について、「学校全体、地域や保護者など広い視野をもっている (5)」「テーマから教えられた (2)」「テーマの想いや考えがよい (2)」「想いが伝わるテーマ (2)」「言葉選びがよかった (1)」「情勢との一致 (1)」「着想がよかった (1)」「未来志向で力強いテーマ (1)」があげられた。【課題 (5)】について、「低学年には難しい言葉があった (4)」「テーマの長さ (1)」があげられた。

保護者へのアンケートでは、「子どもたちが決めたテーマはどのように思いますか」という質問について、表9のようになった。結果、無記入を除き33名が肯定的に回答しており、具体的には、「『当たり前を大切に』のよさ (10)」「前向きさ (6)」「よいテーマ (4)」「周囲のことを考えられている (4)」「今だからこそ創れるもの考えた (3)」「子どもたちが創った (2)」「想いのあるテーマ (2)」「希望のあるテーマ (1)」「未来に立ち向かう (1)」「力強いテーマ (1)」「状況にあうテーマ (1)」「元気をもら

表8. 教職員へのテーマに関するアンケート結果

成果 or 課題	カテゴリー	コード
成果 (15)	学校全体、地域や保護者など広い視野をもっている(5)	地域や保護者にも目が向けられたよいテーマである(3)
		地域や保護者の人たちに喜んでもらえた(1)
		最上級生として学校全体のことを考えられている(1)
	テーマから教えられた(2)	毎日を大切に、環境の中でできることを考える大切さを教えてもらった(1)
		「当たり前」は当たり前ではないと教えられた(1)
	テーマの想いや考えがよい(2)	テーマの想いが良かった(1)
		考えの深さに驚いた(1)
	想いが伝わるテーマ(2)	気持ちが伝わったテーマで見る人に伝わるものであった(1)
		想いがよくわかるテーマになっていた(1)
	言葉選びがよかった(1)	「コロナ」という言葉を入れなかったのは正解だった(1)
情勢との一致(1)		今の世の中のみんもの思いと合致している(1)
着想がよかった(1)	「当たり前」に目を向けたところが特に良かった(1)	
	未来志向で力強いテーマ(1)	エネルギーに満ちた、未来に続く力強いテーマである(1)
課題 (5)	低学年には難しい言葉があった(4)	ニューカルチャーの意味が低学年にはわかりづらかった(2)
		低学年にニューカルチャーの説明をしてほしかった(1)
	テーマの長さ(1)	ニューカルチャーの意味が難しかった(1)
		もう少し短いと看板をつくるのが簡単だった(1)

表9. 保護者へのテーマに関するアンケート結果

カテゴリー	コード
「当たり前を大切に」のよさ(10)	「当たり前の大切さ」に気づき感謝したからこそ、いろんなアイデアがでていとおもった(1)
	「当たり前を大切に」は、大人の自分も運動会で学べた(1)
	当たり前を大切に考えられることがすごい(1)
	人生において大事な「当たり前を大切に」に気づけたことはすばらしい(1)
	今までの当たり前を考え直すことができるテーマ(1)
	「当たり前を大切に」という言葉に考えさせられた(1)
	何が大切かを見つめ直すよい経験になった(1)
前向きさ(6)	コロナで失われる中で、当たり前を大切にしたいという思いが届いた(1)
	普段なら当たり前にある運動会を考えてつくりあげた(1)
	当たり前は当たり前でないことを実感できている(1)
	前向きなよい言葉だと思った(2)
よいテーマ(4)	コロナでも、できることをやろうという感じがした(1)
	仕方がないと諦めず、できることをポジティブに考えた子どもたちを誇りに思う(1)
	中止決定でも諦めない前向きさ(1)
周囲のことを考えられている(4)	前向きで成長を感じた(1)
	よいテーマである(2)
今だからこそ割れるものを考えた(3)	よく考えられた深いテーマである(1)
	読みやすい、テンポもよい、わかりやすい、若さがあふれたよいテーマ(1)
	周囲のことをよく考えているテーマである(2)
子どもたちで創った(2)	みんなに笑顔になってもらいたい思いが伝わった(1)
	自分だけでなく周囲のことも考えている頼もしいテーマ(1)
想いのあるテーマ(2)	当たり前がなくなった今、できることが何かを考えていったことが現れている(1)
	「こんな時だからこそ」何ができるのかを考え、精一杯表現されていた(1)
希望のあるテーマ(1)	今だからこそ割れる行事、アイデア、想いが込められている(1)
	自由が制限されても子どもたちで創り上げられたのがよかった(1)
未来に立ち向かう(1)	6年中心に考えられよいテーマだった(1)
	様々な想いが込められて素敵なテーマである(2)
力強いテーマ(1)	中止や制限ばかりの中で、とても希望のあふれる言葉だと思う(1)
	子どもの方が我慢してきたのに、元気をもらえた(1)
状況にあうテーマ(1)	みんなで未来に立ち向かうとするインパクトがある(1)
	とても力強くおもった(1)
元気をもらえた(1)	今後も不透明な中で、引き継ぐにはびつたりのテーマ(1)
	子どもの方が我慢してきたのに、元気をもらえた(1)

えた(1)」があげられた。

(2) 考察

6年生のほとんどの児童、教職員、保護者ともに、運動会のテーマやその表現について肯定的な評価をしている。具体的な評価としては、「当たり前を大切に」という言葉は、大人にとっても考えさせられる内容であり、高く評価されている。また、テーマが、6年生だけではなく学校全体、参観する地域や保護者などの周囲の人も考慮に入れて考えていることや、みんなで何度も議論して想いのつまったものとなっていること、そして、情勢を把握し、直面する困難の中でも前向きに考え、未来に向かう希望のあるものとなっていることなどが肯定的に評価されている。ただし、「ニューカルチャー」という表現については、低学年の理解に課題があり、説明が必要であったと指摘されている。

なお、6年生へのアンケート結果で、自分たちのテーマを運動会で表現できたかどうかについて、「少

し違うと思う」と回答した子どもの直接的な理由は、アンケート結果からは把握できなかった。

3. 新型コロナウイルス感染症予防対策について (1) アンケート結果

6年生へのアンケートでは、「コロナ学習は運動会をつくる上で役立ちましたか」という質問について、29名が「そう思う」、6名が「少しそう思う」と回答した。教職員へのアンケートでは、「子どもたちが考えた『D祭』のコロナ対策はよく考えられたと思いますか」という質問について、11名が「そう思う」、6名が「少しそう思う」と回答した。保護者へのアンケートでは、上記と同様の質問について、30名が「そう思う」、3名が「少しそう思う」と回答した。

6年生へのアンケートでは、「各チームの話し合いで、コロナ学習が具体的にどのようなことに役立ちましたか」という質問について、表10のようになった。結果、「人との間隔をあけての空気・接触感染の予防(6)」「対策をよく考えられた(6)」「マスクによる空気・飛沫感染の予防やその必要性(5)」「消毒の仕方や消毒・手洗いの必要性(4)」「消毒場所や旗の前での密の回避(4)」「手袋や道具の共有を回避した接触感染の予防(3)」「参観者への対応(2)」「競技・演技のコロナ対策(2)」「テーマづくり(2)」「予防対策による演技の可能性理解や恐怖感の軽減(2)」「コロナの特性や対策の理解(1)」「感染予防の観点から演技内容の決定(1)」「ウイルスの生存時間を考慮した接触感染の予防(1)」「対策部員の動き(1)」「プログラムの順番(1)」があげられた。2名は、「なし(2)」と回答していた。

教職員への6年生による事後アンケートでは、「コロナ対策について、ご意見がありましたら記述してください」という質問について、表11のようになった。【成果(11)】について、「対策の徹底(5)」「学習内容の活用(4)」「最大限の工夫(2)」があげられた。【課題(11)】について、「早期の物品購入(2)」「事後の整理(2)」「対策の考え方の不一致(1)」「協力者の増加(1)」「対策の打ち合わせ(1)」「食べ物のあつかい(1)」「盛り上がったときの対策(1)」「物品の準備不足(1)」「今後活かす(1)」があげられた。

保護者へのアンケートでは、上記と同様の質問について、表12のようになった。【成果(33)】については、「消毒の対策(8)」「よくできていた(8)」「コ

表 10. 6年生への感染予防対策に関するアンケート結果

カテゴリー	コード
人と人の間隔をあけての空気・接触感染の予防(6)	人と人との間隔を考えられた(2)
	全校生演技で間隔をあけたり、重ならない位置を考えるのに役立った(2)
	三密回避を学習したから、全校生演技で間隔をあけることを考えられた(1)
対策をよく考えられた(6)	引き継ぎ式で、間隔をあけるなど対策を考えられた(1)
	コロナ対策を全体的にしっかり考えられた(2)
	コロナ対策の方法を考えるのに役立った(2)
	予防方法の学習を生かして話し合いをした(1)
マスクによる空気・飛沫感染の予防やその必要性(5)	コロナ対策を考える機会が増えて考える力がよくなった(1)
	開閉会式では集合するためマスクをつけることを考えられた(2)
	飛沫の距離を考えて間をあければ安心だと考えられた(1)
	開閉会式ではマスクが必要になり、応援合戦では息苦しいためマスクをはずし、待機中は密になるためマスクをつけるなど、「いつ、何をしているか」によって、マスクをつける時かどうかを考えられて役立った(1)
	マスクは意味がないと考えていたがその必要性がわかった(1)
消毒の仕方や消毒・手洗いの必要性(4)	消毒や手洗いの必要性を理解することができた(1)
	どう消毒の仕方をするとよいかを考えられた(1)
	4年生の競技終了後に消毒をさせた(1)
消毒場所や旗の前での密の回避(4)	鉄などに付着しやすいため、一輪車の持ち手を消毒した(1)
	消毒の位置を決める時(1)
	どのような順番で消毒をしたらよいかを考える際に役立った(1)
	消毒の数を準備するのに役立った(1)
手袋や道具の共有を回避した接触感染の予防(3)	旗は、遠くから見えるように大きな絵を描いた(1)
	引き継ぎ式で、接触を回避するために手袋をつけるなど対策を考えられた(1)
手袋の利用(1)	手袋の利用、給食い競争の粉の入れ物をわける(1)
	手袋の利用、給食い競争の粉の入れ物をわける(1)
参観者への対応(2)	参観者にもマスクをしてもらい飛沫感染を予防する対策を考えるのに役立った(1)
	保護者や地域の人々が安全にこられるような対策を考えられた(1)
競技・演技のコロナ対策(2)	各学年競技のコロナ対策のチェックに役立った(1)
	全校生演技の玉入れの方法を学習したことを生かして考えられた(1)
テーマづくり(2)	テーマでコロナは必要か、苦しい人の気持ちをわかり、どうすれば楽しんでもらえるのか考えるのに役立った(1)
	テーマに「コロナ」の文字を入れるかを話し合うとき、コロナの恐ろしさを知ったおかげで、入れないでおこうと考えられた(1)
予防対策による演技の可能性理解や恐怖感の軽減(2)	全校生演技でも間隔を考えれば演技ができるんだと考えた(1)
	コロナも予防対策をすれば怖くない病気で、怯えてばかりではなく頑張ろうという気持ちになれた(1)
コロナの特性や対策の理解(1)	コロナについての発表内容を考える時(1)
感染予防の観点から演技内容の決定(1)	全校生演技でいくつか案がでた時に、学習したコロナ対策を考えて玉入れに決定できた(1)
ウイルスの生存時間を考慮した接触感染の予防(1)	使用した衣装を机の上で広げて1日後に片付けた(1)
対策部員の動き(1)	コロナ対策部員の当日の配置を考える時に役立った(1)
プログラムの順番(1)	プログラムをつくる時に、当日のコロナ対策を考えたり想定したりした(1)
なし(2)	役立ったことはなかった(2)

「コロナ学習の成果(5)」「距離の対策(3)」「子ども同士の声かけ(2)」「競技の工夫(2)」「マスクの工夫(1)」「手袋の使用(1)」「手洗いの対策(1)」「道具管理(1)」「みんなで検討した成果(1)」があげられた。【課題(2)】については、「観客の距離(2)」があげられた。

(2) 考察

以上より、保健学習と運動会の自治活動が関連したことが示唆され、また、活用した結果も保護者および教職員に肯定的な評価をえられている。具体的

表 11. 教職員への感染予防対策に関するアンケート結果

成果 or 課題	カテゴリー	コード
成果(11)	対策の徹底(5)	競技の前後での感染対策もよく考えられていた(1)
		コロナ対策についてよく計画できていた(1)
		自分たちで消毒の呼びかけ、競技中の消毒をして頑張っていた(1)
学習内容の活用(4)	よく考えられていた(2)	
	コロナ学習を生かした感染対策であった(2)	
	コロナ学習の成果を発信していたことが有意義でよかった(1)	
最大限の工夫(2)	コロナ学習を生かした感染対策であり、説得力があった(1)	
	消毒や呼びかけなど感染リスクを最小限にするためにできる範囲で精一杯やっていた(2)	
	早期の物品購入(2)	必要な物品は早期(2週間前)にリストを提出するなどして要望・相談する必要がある(2)
課題(11)	事後の整理(2)	実際に取り組んで気づいたことを出しておくとよい(2)
	対策の考え方の不一致(1)	1人1人コロナ対策に対する思いや考えが違うのですり合わせるのが大変だった(1)
	協力者の増加(1)	コロナ対策部だけではなく、もう少し多くの人(教員・4年生以上)の協力を得て声かけできたらよかった(1)
	対策の打ち合わせ(1)	内容と役割決定が直前となり、打ち合わせにもう少し余裕がほしかった(1)
	食べ物のあつかい(1)	親子競技で食べ物を使用するのが気になった(1)
	盛り上がったときの対策(1)	応援や自分たちの演技では力が入り、対策が不十分に見えた(1)
	物品の準備不足(1)	ウェットティッシュが不足し、本部まで取りに走るということもあった(1)
今後活かす(1)	これから普段の生活にも生かしてほしい(1)	

表 12. 保護者への感染予防対策に関するアンケート結果

成果 or 課題	カテゴリー	コード
成果(33)	消毒の対策(8)	消毒がきちんと対策ができていた(5)
		マイクを除菌シートで拭いており色々と考えたことがわかった(1)
		その都度道具を除菌して試してみんなのことを考えられているとおもった(1)
	よくできていた(8)	細やかに消毒部隊が入りきちんとできていた(1)
		よくできていた(3)
		よく考えられていた(2)
	コロナ学習の成果(5)	子どもたちなりに考えていた(2)
		創り上げたことをめざしてみんなで頑張っていた(1)
		勉強した成果ができていた(3)
	距離の対策(3)	勉強した成果をふまえてみんな対策を考えていた成果がでた(2)
		間隔の指示をしてよかった(1)
	子ども同士の声かけ(2)	距離の徹底が印象的であった(1)
		距離の取り方などよく考えられていた(1)
競技の工夫(2)	子ども同士で気をつけていたのがよかった(1)	
	子ども同士で声をかけあう姿がよく見られた(1)	
マスクの工夫(1)	玉入れでは競技の仕方の工夫がみえた(1)	
	1つ1つの競技に工夫がされてよく考えられていた(1)	
手袋の使用(1)	マスクの工夫がよく考えられていた(1)	
	手袋を使用してよく考えられていた(1)	
手洗いの対策(1)	手袋を使用してよく考えられていた(1)	
	道具管理(1)	手洗いがきちんと対策ができていた(1)
みんなで検討した成果(1)	道具管理(1)	道具管理がきちんと対策ができていた(1)
	観客の距離(2)	話し合い考えた結果があらわれていた(1)
課題(2)	観客の距離(2)	屋外であり、距離をとればもう少し観客数を増やせた(1)
		観客が立ち見で少し密になっていた(1)

な関連の仕方としては、コロナ学習によって、感染予防対策の方法やその必要性についての理解が深まり、運動会づくりの様々な場面での具体的な対策の仕方を考えることに寄与したことが把握できる。また、感染予防対策のために多くの行事が中止される中で、ウイルスの特性を理解して予防対策を徹底すれば実施できる可能性があることを理解し、不安や恐怖感の軽減につながっている。さらに、特徴的なこととして、アンケートからは、感染予防対策だけではなく、テーマづくりにおいても役立ったことが回答されていることがあげられる。具体的には、「コ

ロナ」という文字をテーマに採用するかどうかを検討する際、コロナ学習において、感染症に罹患した方の心境を考えていたことが生かされている。傷ついた方の存在を自覚し、最終的には採用しないと結論づけている。

学習成果が活用できていたこともあり、教職員と保護者からは、道具を使用したらその都度消毒を実施していたことや、一貫して飛沫・空気感染を予防するために人と人との間の距離を確保していたこと、そして、子ども同士で注意喚起しながら感染予防対策を徹底していたことなどが評価されている。一方で、必要な物品の準備がギリギリになってしまったことや当日感染予防対策を呼びかける人手の不足、盛り上がった時に感染予防対策が不十分となったこと、参観者への対応について、課題が指摘されている。

4. 保護者との連携について

(1) アンケート結果

保護者へのアンケートでは、「子どもたちとご家庭でD祭について話をしましたか」という質問について、23名が「そう思う」、9名が「すこし思う」、2名が「少し違うと思う」と回答された(1名無記入)。また、「子どもたちとご家庭でどのような話をしたのか、具体的に教えてください」という質問について、表13のようになった。結果、「自分のかかわり方について(10)」「活動状況の報告(9)」「運動会について(5)」「コロナ対策についての質問や相談(5)」「意見の相違や一致についての報告(4)」「下級生への指導について報告や質問(3)」「参観者が楽しむための工夫についての質問や相談(2)」「学級通信の内容(1)」があげられた。

(2) 考察

多くの家庭で子どもと保護者が運動会について話をしており、保護者も子どもたちの自治活動を支援していたことが示唆される。家庭での具体的な会話内容としては、自分が運動会やその準備にどのように取り組もうとしているか、また、運動会の準備状況をどのように進めているかが中心となっている。その次に、コロナ対策や意見の相違など、活動上で困ったことについて質問や相談をしている。少数であるが、参観者として何を期待するかを質問している例もある。これらは、現在の自分たちの活動を報

表13. 保護者への家庭での交流に関するアンケート結果

カテゴリー	コード
自分のかかわり方について(10)	自分以外の子の頑張りや自分も頑張るといふ意気込み(1)
	準備を頑張っていること(1)
	大変だと思いつつも放課後も残って頑張ったこと(1)
	とても緊張していたという話(1)
	本番が近づくにつれて、考えたことが自信となり、責任感がでて、成功したいと思うようになったこと(1)
	自分はどのようにwithコロナで役割を果たそうとしたか(1)
	自分がどんな事をしたいと考えているか(1)
	自分が頑張りたいこと(1)
活動状況の報告(9)	みんなの前で発表することへの不安(1)
	たくさん考えてできた喜び(1)
	どのようにコロナ対策をするか(4)
	話し合いや競技の内容、結果について(2)
運動会について(5)	クラスで役割分担して、皆がそれぞれ対策を考えていること(1)
	全校生競技について考えたことをよく話した(1)
	どんなふうにするのか(1)
	以前までの運動会とは違うところがどこか(1)
	運動会ができることになった嬉しい(1)
コロナ対策についての質問や相談(5)	時間も短く出番も少ないけれど、内容が濃い運動会だという話(1)
	みんなで考えて思い出になるといいなということ(1)
	楽しみにしててなあ！と嬉しそうに話しかけてくれた(1)
	感染対策について、「大人の(お母さん)だったらどうする？密にならない競技は？とたくさん質問があり、お互い案を出し話し合った(1)
	「今、こんな事を考えているんだけど、どういう感じにしたら良い？」など、アドバイスを求めてくる時もあった(1)
意見の相違や一致についての報告(4)	「どうすれば安全かな？」と質問を受けた(1)
	親の職場でのコロナ対策方法を聞いたりして参考にしていた(1)
	コロナ対策をどうするか難しい事だということ、みんなはどう考えるかなど(1)
	一つのアイデアが思い浮かんでもポツンだったり、大人顔負けの様子(1)
下級生への指導について報告や質問(3)	実行委員となり、企画、準備など考えることの多さや意見の違いのこと(1)
	自分はこう思うけど、友達はこういう風に考えていた。初めてのD祭に対して、特別これが正解ということはないよね、皆いろんな考えがあるね、でも、最後の小学校生活悔いのないように楽しみたい気持ちは皆一緒！！ということなど(1)
	コロナ対策(消毒、ソーシャルディスタンスなど)を話し合ったことやそこで意見や考え方が違った話など(1)
参観者が楽しむための工夫についての質問や相談(2)	「下級生に教えるには、どうしたらいい？」と質問を受けた(1)
	6年生としてどのように下級生をリードしたか(1)
学級通信の内容(1)	低学年への指導への不安(1)
	「お母さん達はどんなことしてほしい？」と質問を受けた(1)
	コロナ対策をしながらどのようにみんなが楽しくでき、笑顔にできるかを話した(1)
	学級通信の内容を詳しく聞いた(1)

告して整理することや、それに対する励ましや承認、称賛などの肯定的な反応をもとめること、そして、困った事を相談したり、参観者の意見を把握したりして、活動のヒントにしようとするなど、様々な意図があると考えられる。子どもたちの多くが家庭での相談や励ましなどを支えにして活動していたことが示唆される。

5. 教職員の連携体制について

(1) インタビュー調査から

運動会づくりにおいては、企画・運営・総括のい

ずれの段階においても、教職員の連携は不可欠である。特にコロナ禍においては、複雑な判断も必要となることから、その開催経緯や連携の背景について検討することは重要であろう。以下では、C小学校が開催を決断した背景として、どのような教職員の同僚性があったのかを、F校長へのインタビュー調査から考察する。

まず、運動会開催の経緯として、F校長の判断は次のようなものであった。

6年生のリーダー性を育てるために何かしてやりたいというのは聞いていました。彼（E教諭；筆者追記）がずっと言っていました。なんかしてやりたいという思いはありました。…（中略）…子どもの成長のためには、必要だろうというのにはあったので。リーダー性を育てたいと私自身の中学校でのリーダー育ての経験から、何かしたいなあと思っていました。D祭の前から、教室での自習の様子などを見て、「この高学年は十分に主体的な活動ができる」と感じていました。

この見取りの背景には、F校長の中学校在職時の経験が反映しており、F校長も高学年の様子を観察し、リーダー性を育成したいと考えていたことが把握できる。つまり、小学校を卒業した子どもの成長をある程度見通しながら、F校長の「主体的な活動ができる」という判断と、E教諭の運動会を通して自治能力を育てたいという思いが共振している様子が把握できる。子どもの日々の生活の姿（成長段階）から、次の段階に引き上げようとする教育的必然性が運動会開催に踏み切った要因の1つとなっているのである。

また、F校長によると、C小学校では、教職員の連携体制が運動会開催前にすでに構築されていたことを、次のように述べている。

この間、コロナの学習をZoomでしたんですけど、すぐに5年生もやりたい、4年3年もやりたいとなりました。Zoomの授業は6年生だけでしたが、それをもとに5年生でやってみたりとか。今の学校に必要なだと思ったらそれを一致団結してやってくれます。実は今年の8月6日も授業だったのですが、原爆の日でその日をうまいこと平和学習したいんですということ、それを聞きつけると他の学級でも行かいます。

このように、C小学校では、日常的に教師の意欲的な実践が交流されたり、「やってみよう」という提案ができたりする状況にあった。そして、「今の学校に必要なだと思ったらそれを一致団結してやってくれる」ような教職員の連携体制が構築されており、それが教職員集団全体の実践意欲に昇華されて

いる。運動会開催の背後には、C小学校における実践づくりを共有する同僚性が土台となっていた。

さらに、F校長は、教職員が子ども主体の運動会づくりとなるように、「待ちの姿勢」を大事にしていたことや、F校長もそれを励ましていたことを、次のように述べている。

これまで通りではないので、待っていてあげようとか、そういう気持ちは皆さん持っていてくれたと思います。結構決めたことが変わったこともあったりして。でも意見も言って最終的にこれでいこうかと…。意見を言ってくれるということは、真剣に考えていてくれることだから、それはどんどん言いましょと。

（F校長は子どもたちに；筆者追記）「仕方がない。初めてのことだから。出てこないよ」「こんな経験ないぞ」「しんどい時を楽しもう」と話していました。…（中略）…先生たちにもそう話していました。

ここでは、教職員が「子どもの議論を待つ」という姿勢での連携を試みていることが把握できる。そしてそれを、自治的な指導に関心をもったF校長も励ますことで、自治指導の連携体制が強固になっていることが示唆される。

以上のように、C小学校における教職員集団は、F校長のリーダー性を育成したいという思いや、日常的な意志表明と実践交流の関係性が構築されていたことが、運動会開催の決断および自治指導における「子どもの議論を待つ姿勢」を伴う連携の礎になっていたと考えられる。

（2）アンケート結果と考察

しかし、運動会づくりにおける教職員の連携体制については、課題も見られる。教職員を対象にして、「教職員の組織作りや連携について、よかった点や課題となった点について記述してください」と質問した結果、表14のようになった。

《教師（42）》については、次のようになった。【成果（14）】は、「教職員の共通理解（8）」「子どもとともにつくる（2）」「教職員の連携体制（2）」「コロナ対策の理解の深まり（1）」「主体性をひきだす教師の指導（1）」があげられた。【課題（28）】は、「教職員の共通理解（5）」「教職員の連携体制（8）」「練習時間の短さ（3）」「常勤ではない教員への配慮（2）」「密を避ける対策（2）」「主体性をひきだす教師の指導（1）」「行事全体の負担軽減（1）」「事前の練習計画（1）」「駐車場係の分担（1）」「PTAの協力（1）」「保護者への案内（1）」「行事の性質変化（1）」「他機関

表 14. 教職員への連携体制に関するアンケート結果

対象	成果 or 課題	カテゴリー	コード
教師 (42)	成果 (14)	教職員の共通理解(8)	何度も話し合いを重ね、情報共有できた(4)
			6年生担任が子どもたちの思いを受け止め、教職員に共通理解を図ったことで、意識すべき点を常に考えられた(1)
			協力できていたとおもう(1)
		子どもとともに(2)	子どもたちのためにできることを全職員が考えることができた(1)
			教職員の連携はすごくできていた(1)
	教職員の連携体制(2)	子どもたちと一緒に、一つのを創り上げていくのは、大変よかった(1)	
		各学年の競技は、発達段階に合った内容を見直しと教師で創造できた(1)	
	コロナ対策の理解の深まり(1)	何度も話し合いを重ね、解決したり、新たな課題が見つかったりした(1)	
	主体性をひきだす教師の指導(1)	コロナ禍でも行事をしようと教職員が動いていた(1)	
	課題 (28)	教職員の共通理解(5)	6年生の動き、困り事、他学年の競技内容等わからないことも当日のイメージがもちにくかった(1)
			アイデアが次々にでて変化したため、全体の情報共有ができなかったところがあった(1)
			職員会議で決定したことと6年の各部で話し合っていることのすりあわせを頻繁に行う事が必要であった(1)
			初めてのことで、全体像は共通理解できたが、細部については把握できていないことも多かった(1)
			元々体育科の発表会だったため、各学年に任せてきたが、全体の途中経過の情報交換の機会がもつとほしかった(1)
教職員の連携体制(8)		高学年担任の荷重負担となっているため、無理なく進められる方法や分担する方法を考えたい(5)	
		推進派・慎重派の話し合いが大切で、教職員の温度差をどう埋めるか(1)	
		新しい行事なので仕方のない部分もあるが、駐車場や来場者の動線等、競技外のことで共通理解・連携がとれていなかったことがあった(1)	
練習時間の短さ(3)		最初に全体像がみえなかったため、組織的にできたかどうか難しい(1)	
		運営面では、試行見直しのために予行がほしかった(1)	
常勤ではない教員への配慮(2)		事前の予行練習があれば、流れや動きを確認し調整できる(1)	
		元々体育科の発表会だったため練習時間が短縮化された(1)	
密を避ける対策(2)		常勤ではない教員の担当決めは配慮が必要である(1)	
		大きな学校行事でもあるため、必要なことは再任用であっても課してもらいたい(1)	
主体性をひきだす教師の指導(1)	閉門から行事開始までの時間が短く、経路が密になった(2)		
	先生方もどの段階でどの程度手を貸していけばいいかと悩まされていた(1)		
行事全体の負担軽減(1)	高学年や児童の負担が大きかったので、内容を精選する必要がある(1)		
	事前に練習計画(1)	はじめに練習計画を立てておくイメージしやすかった(1)	
駐車場の分担(1)	駐車場係について分担ができておらず準備不足となり、当日混乱した(1)		
	PTAの協力(1)	PTAにお手伝いいただかなかったため、来年は協力がほしい(1)	
保護者への案内(1)	保護者の参観について案内ごとに変化したため、十分に伝わっていない点もあった。プールの位置がわかりづらくトイレの場所も迷った人がいた(1)		
	行事の性質変化(1)	授業の延長での発表会だったが、保護者参観など、徐々に行事の性質が少し変化してきた(1)	
他機関の行事把握(1)	平日開催の場合、他機関の行事を予め把握すべき(1)		

の行事把握(1)」があげられた。

結果、教職員の連携体制について、複数回にわたる議論や情報共有がなされ、連携が十分であったことや子どもと一緒につくっていったことが評価されている一方で、全体像や6年生の動きの細部については十分な連携や共有が図れなかったこと、高学年担任への荷重負担となってしまったことなどが課題としてあげられている。中には、教職員だけではなく子どもにとっても負担が大きいことから、行事全体の見直しを課題とする記述もある。また、全体として課題の方が多く記述されており、競技外の分担や常勤ではない教員への配慮、他機関の行事の確認

など、不十分な点が記述されている。

6. 運動会づくりによる教育的効果について

(1) アンケート結果

保護者へのアンケートでは、「子どもたちはD祭を通して具体的にどのように変わったことや成長したことがありましたか」という質問について、表15のようになった。結果、「他者との協調性や思いやり(8)」「主体的な行動力(6)」「責任感(4)」「リーダーシップ(4)」「思考力(3)」「感染予防行動(3)」「自信(3)」「最高学年としての立ち居振る舞い(2)」「登校意欲(2)」「しっかりした(1)」「企画・運営の大

表 15. 保護者への運動会後の変化に関するアンケート結果

カテゴリー	コード
他者との協調性や思いやり(8)	友達の意見を否定せず、受け止められるようになった(1)
	友達の意見にも耳を傾け、自分の意見を見つめ直せるようになった(1)
	友達の頑張っている所を見つけ、ほめられるようになった(1)
	友達の良い所をたくさん見つけたようで、心の成長を感じた(1)
	低学年に考えを理解してもらう困難さから表現の仕方を試行錯誤していた(1)
主体的な行動力(6)	下の子を思いやる気持ちがみられた(1)
	みんなへの思いやりをもつことができ、成長がみられた(1)
	協力する力がついた(1)
	自分で考え行動するようになった(2)
	自分たちで運営する行動力が身についた(1)
責任感(4)	自分から積極的に行動するようになった(1)
	自分から意見するようになった(1)
リーダーシップ(4)	発言する力、発信する力が養われた(1)
	責任感が身につけられた(4)
	リーダーシップが感じられた(1)
思考力(3)	下級生を指導している場面などは今まであまり見た事がなかったので成長したと感じた(1)
	大きな声で下級生へ指示をだしていた(1)
感染予防行動(3)	自分達が中心になり成功させようという気持ちがあふれていた(1)
	考える力が身についた(2)
自信(3)	リーダーをこなし、考える力がついた(1)
	になり、責任感がでた(1)
最高学年としての立ち居振る舞い(2)	マスク装着、手指消毒等が習慣づけられた(1)
	マスク着用、手洗いや消毒対策を具体的に考えるようになった。(1)
登校意欲(2)	すべて自分達で考え、クラス全員が1つになり、自分達だけでここまでできるんだという自信につながった(1)
	自信とやる気等の心の成長につながった(1)
しっかりした(1)	自分達の行動が学校を変える事が出来る！と自信につながった(1)
	最高学年としての責任感ができた(1)
企画・運営の大変さの理解(1)	未っ子だが高学年ということを実感した(1)
	はりきって学校に行くようになった(1)
低学年との交流(1)	楽しそうに学校に行っていた(1)
	しっかりしてきたと思いました(1)
困難に直面する中での前向きな考え方(1)	企画、運営するということは、自分たちの想いだけではできないということがわかり、どうしたら良いかを考えたり、色んな人の協力を得たりしながら、実現することができ、とても成長できた(1)
	低学年の子の話をよくするようになった(1)
努力する力(1)	制限された中でもできることをやろうという前向きな考え方ができるようになった(1)
	努力する力がついた(1)
感動を与える喜びを感じられた(1)	感動を与える喜びを感じられた(1)
	自分だけでなく、見守る人に感動を与える喜びを感じられた(1)
運動会を創りあげたことが成長(1)	以前より成長した(1)
	大きく前より成長した(1)

変さの理解 (1)」「低学年との交流 (1)」「困難に直面する中での前向きな考え方 (1)」「努力する力 (1)」「感動を与える喜びを感じられた (1)」「以前より成長した (1)」「運動会を創りあげたことが成長 (1)」があげられた。

(2) 考察

この結果からは、自治活動を重視する運動会では、他者と協調しながら、自ら考え、積極的に行動しようとする姿勢や、責任感や自信をもってリーダーシップを発揮する姿勢が形成されていることが示唆されている。また、保健学習の発展的な学びを経験し、感染予防対策が習慣化された様子もみられる。保護者の実感的な評価であるが、子ども主体の運動会づくりの過程で、教育的な効果があったことを把握できる。

Ⅸ 運動会の総括の指導と次年度への引き継ぎ

1. 総括のためのアンケートの実施

E教諭は、D祭の総括までを自治指導の一環と考え、実行委員会を中心に総括のための事後アンケート調査を実施させている。実行委員会は、D祭開催の前に教職員へ事後アンケートの実施許可を依頼していた。そのため、D祭終了後、実行委員会を中心にして、全校生、教職員、保護者を対象にした事後アンケートを作成している。なお、全校生への事後アンケートは、各学年の発達段階に合わせたものを作成している。事後アンケートの実施にあたって、E教諭は、「もしもう1回D祭を自分たちで創るとしたらどんなふうに創るか」を課題として提示している。これにより、「引き継ぎありき」ではなく、まずは自分たちの運動会を総括することを目的とするよう意図していた。

事後アンケート回収後、6年生でアンケート結果から導きだされた課題について協議している。特に問題になったのが、スケジュール管理、コロナ対策、「お祭り」要素であった。スケジュール管理については、アンケートでギリギリに依頼がきて困った事が回答されていたことから、あらためてスケジュールについて話し合いをしている。そこでは、開催日から逆算して、いつまでに演技図や放送原稿ができてきたら、コロナ対策を考えられるのか、また、その

ためにいつ頃依頼するとよいのか等の話し合いが行われている。また、この時、5年生担任の要望で、5年生がスケジュールの話し合いを見学している。5年生に対しては、話し合いの中身はあくまでこういうプランがあるという参考程度にとどめ、具体的なことは来年度に自分たちで決めればよいと提示している。

コロナ対策については、応援席での飛沫・空気感染が課題としてあげられたため、待機場所では声をださなくてもよくなるような応援グッズを使用するなど、工夫の仕方を話し合っている。また、感染予防対策の観点から競技内容や食べ物の取り扱いについて協議している。さらに、協議の中で、低学年に間隔をあける指示が十分に通らなかったこともあり、コロナ対策の注意喚起では限界があり、各学年でマスクの必要性などのコロナ学習をする必要があるといった結論がだされている。

最後に、「お祭り」要素についてである。総括をする時に、ある子どもが「自分たちでD祭をつくったけれど、例年の運動会と内容自体に変化はあまりない」という発言があった。この発言の際に、E教諭は、名称に「祭」の文字があるが、その要素がどこまで含まれていたのかを問いかけている。そこから、E教諭は、国語科における「町の幸福論-コミュニティデザイン」の単元と関連させて、D祭を地域のお祭りとしてデザインするとしたら何ができるのかを学習課題として設定する。そして、保護者に再度、D祭にどのようなお祭り要素を入れられるのかをアンケートした上で、子どもたちと議論を重ねている。

以上のように、E教諭は、D祭を企画・運営させるだけでなく、終了後に総括の時間を設定している。引き継ぎ式を実施し、後は何もしないということではなく、自分たちの総括をする過程で、次年度のヒントになるものを考えだしている。決して5年生に押し付ける方法でないことから、次年度も「今の5年生が主体となって、自分たちで創り上げてほしい」というメッセージになっていると考えられる。

2. E教諭による引き継ぎ

子どもたちだけではなく、E教諭自身も、教職員へ次年度に向けた総括と「新年度プラン」を提案している。E教諭の主な提案は3つである。

1つ目は、春開催から秋開催への移行である。運

動会後の協議において、子どもたちから、次年度は秋開催でなければ、十分に話し合いながら準備する時間が確保できず、自分たちで創るD祭は成功しないという意見がでていた。そのため、E教諭は、子どもの意見をふまえながら、秋開催への移行を提案している。この提案はのちに承認される。

2つ目は、6年担任への荷重負担を回避し、教職員の連携体制を強固にするために、既存の委員会活動をもとにしてD祭の自治活動を組織する提案である。具体的には、児童会が開閉会式の企画・運営とテーマの検討をし、保健委員会が感染症対策を検討し、放送委員会がポスターの作成、放送原稿の集約をするなどといった提案となっている。

3つ目は、お祭りとしての運動会の提案である。地域が昔から継承している「お祭り」をもとに、具体的にどのような要素が導入できるのかを提案している。その内容は、6年生の総括をふまえたものとなっている。もともとE教諭は、運動会が地域の「お祭り」として継承させられてきた背景があることから、「お祭り」的な要素を運動会の演出に採用したいと考えていた。子どもたちの想いを参観者となる地域の人たちへ届ける意味でも重要視していた。そこで、E教諭は、C小学校の地域で継承されていた、伝統的なお祭りに着目し、お祭りと同様の形式で開会式の演出をすることを検討する。しかし、地域の方に提案したところ、準備期間が短いためにできないと断られ、断念していた。こうした意図をもち、6年生での総括をふまえ、次年度の引き継ぎ事項として職員会議で提案するに至っている³⁾。

X 総合考察

1. 運動会づくりの指導の特徴

本研究では、新型コロナウイルス感染症予防対策下における体育的行事の実態を、運動会における自治指導、意志表明の内容、保健学習の発展、教職員や家庭との連携の観点から分析した。E教諭を中心とする運動会の指導の特徴やその成果としては、次のことがあげられる。

第1に、子どもたちの生活的な想いや願いを出発点にして、運動会を自分たちでつくるという自治活動の見通しを子どもたちにもたせている。E教諭は、6年生の声や全校生アンケートから、コロナ禍における子どもたちの不満や悲しみ、また、運動会開催

の要求を確認する。そしてそこから、子ども主体の運動会の開催を子どもたちと合意し、自治活動への意欲を高めている。子どもの必要や要求を自治活動の出発点にしているのである。こうしたプロセスは、のちに「自分たちで創ると決めただから」という自覚につながり、自治活動で直面する様々な課題に向き合おうとする原動力となっている。

第2に、運動会づくりの目標、内容、方法、総括といったすべてにおいて自治指導している。E教諭は、自治調査やテーマづくりによって、子どもたちと自分たちでつくる運動会の目標を合意形成する。そして、E教諭は、組織体制づくりを契機にして、子どもたちと一緒に自治内容・方法を協議・決定する。これにより、6年生全員が何らかの役割をもって自治活動することを保障している。また、E教諭は、運動会を総括するために、子どもたちに振り返りの感想文を記述させるとともに、アンケート調査を実施させて、次年度に向けた課題を総括させている。総括も、次年度への引き継ぎを押しつけるものとならないよう、あくまで自分たちが創造した運動会の総括が目的となるように課題設定している。こうして、運動会づくりのトータルな自治指導を展開しているのである。

また、子どもたちの自治活動においては、各部それぞれにおいて何度も提案が修正されたり、意見の相違・不一致がうまれたりしており、時にもめ事となりながら話し合いが展開されている。自分たちで決定するために、多様な意見や対立する意見が生まれ、子どもたちも自治活動における問題解決場面でのつまずきを経験しているのである。しかし、運動会後のまとめの感想文にみられたように、困難に直面してもあきらめずに真剣に向き合い解決しようとする仲間の姿や、意見がずれていてもD祭を創ることへの共通の想いや目標をもった仲間の存在に気づくことで、子どもたち同士の関係性が深まり、集団的な自治活動を展開するエネルギーへと転化している。さらに、各部で考えたことを仲間や全校生に説明したり、教職員に実施内容の許可や物品購入を要求したり、下級生へ演技指導したり、期限までに決定・完成させることなどは、子どもたちにとって大きな緊張感をともなうものであり、人前に立ったり、大きな仕事を任されたりする責任ある活動として直面されている。こうした自治活動における協同的な問題解決（意見の不一致と合意形成）や責任あ

る活動を通して、他者の考えを受容・尊重したり、自分の意見を積極的に表現したり、自分で考え行動することの大切さを学んでいる。共通の想いをもつ仲間と創り上げたことが大きな達成感や喜び、自信となり、保護者にとっても成長を実感する経験となっている。これらは、自治活動だからこそ生じたものと考えられる。

第3に、主体性発揮の基盤となる運動会のテーマづくりを重点的に指導している。その指導過程においては、全学年へテーマ案を募集し、全校生の想いが込められたテーマとなるよう工夫されている。また、テーマの検討過程では、コロナ禍において運動会を開催する目的を問うたり、「コロナに勝つ・負ける」といった単純な構図でテーマを設定させるのではなく、その具体的な意味を探索する発問をしたりしている。発問を中心として、テーマに子どもたちの生活上の想いや願いが反映するように指導している。単なる楽しみ事、慰み事の領域を超えた、生活の不自由さや不都合さの自覚が、子どもたちの主体性発揮の基盤となっているのである。こうしたテーマづくりの指導においては、担当教師がもつ「運動会」観も影響を与えている。E教諭は、運動会が地域のお祭りとして継承・普及されてきた歴史を考慮し、「お祭りとしての運動会」像をもっていた。そのため、運動会に参観する人が保護者だけでなく地域の人もいることを念頭に置きながら、子どもたちに地域の人への想いを問い、元気になってもらいたいという願いを引き出している。また、E教諭は、地域の人たちと一緒に運動会を創造しようと考えていた。さらに、テーマが「自治の道標」(神谷, 2017, p.46)となるように自治活動が指導され、テーマとの関連で、プログラムの名称や開閉会式の内容が構成されたり、旗のデザインが検討されたりしている。特に、開会式での児童会挨拶や閉会式での引き継ぎ式など、当日はテーマと共通する意志が様々な形で表明され、運動会の参加者とともに共有されている。こうして、全校生の想いを引き取りながら、6年生で喧々諤々の議論がなされ、コロナ禍において地域の人へのメッセージを含めた様々な想いのつまったテーマが創造されている。教職員や保護者もテーマのメッセージ性に共感し、考え直させられたり、元気づけられたりしている。

第4に、保健学習を発展させた自治内容を指導している。新型コロナウイルス感染症の感染予防対策

が運動会開催の必要不可欠な条件となることで、E教諭は、感染症や新型コロナウイルス感染症についての保健学習を実施している。保健学習でウイルスの特性や感染、免疫の仕組みなどを理解することで、科学的な根拠をもって、必要な感染予防対策を検討できるようになり、運動会づくりでは、多くの場面でこの学習が生かされている。特に、運動会当日は、多くの保護者、地域の人が参加するため、保健学習で学んだことを実際に活用・応用する機会となっている。また、コロナ学習は、感染予防対策だけではなく、新型コロナウイルス感染症がもたらした社会問題も対象にしていた。そのため、テーマづくりにおいては、感染症に罹患した人の思いを考えることにつながり、結果、「コロナ」という文字を入れないようにしている。

健康教育においては、健康情報を適切に処理し、意志決定していく能力である、ヘルスリテラシーの形成が実践的な課題となっている(福田・江口, 2016)。世界的な規模で発生したこの度の感染症の問題は、緊急事態宣言をも発令されるなど大きな社会問題になっており、まさに子どもたちや地域全体が当事者となっていた。その中で、感染症の特性を理解して、より効果的な対策を実施しながら、可能な限りの行事づくりを実践することは、健康情報を批判的・科学的に分析するヘルスリテラシーを形成する機会になったと考えられる。このことから、本実践事例は、教科と教科外の統一によって、健康教育の深い学びを実現する典型事例となっており、これまでにない運動会の可能性を提起していると言える。

第5に、運動会づくりにおいては、E教諭の提案に共感し、子どもたちの自治的な学びを保障しようとする教職員や保護者との連携が図られていた。運動会開催の背景には、主体性を育成したいと考える管理職との共振や教職員間での日常的な意志表明と実践交流があった。前年度にE教諭が設置した体育部会も、教職員の合意形成を円滑にするものであり、同僚性の構築に寄与していたと考えられる。また、自治活動の指導において、E教諭は、教職員に自治を育むための連携を依頼し、子どもたちの意志決定を待つ体制や、子どもたちの課題を指摘し、時に壁となるような連携体制が構築されていた。さらに、E教諭は、子どもたちが家庭で保護者と運動会づくりについて交流するように保健学習をふまえた

えんぴつ対談や、運動会新聞づくりなどを指導している。実際に保護者アンケートでは、子どもたちが自分の運動会へのかかわり方や活動状況を話したり、困った事についての質問や相談をしたりしていた様子が把握できた。運動会後の感想文では保護者からの励ましや賞賛を受けて、自治活動をやり遂げようとする姿が記述されていた。運動会の創造過程においては、こうした保護者との交流が下支えとなっているのである。

上述の自治指導により、C小学校では、子ども主体の運動会を創造した。コロナ禍で感染予防対策を理由に行事を中止したり、子どもの主体的活動を断念したりするのではなく、教科の学びを発展させた自治活動へと踏み切るC小学校教職員集団の指導は、看過できない実践事例である。本事例では、子どもたちが運動会づくりのほぼすべての過程において自治活動を実施していたが、その背景には、生活上の想いや願いを出発点にしたトータルな自治指導や、教職員の連携的な指導体制および家庭における保護者との交流があった。運動会終了後のアンケートでは、子ども・教職員・保護者ともに肯定的な評価をしており、C小学校の運動会は、教師、子ども、地域住民による「連帯と団結の意志表明の場」になったと考えられる。

2. 運動会実践の課題

一方で、新型コロナウイルス感染症予防対策が徹底された1年目の開催ということもあり、様々な課題も浮き彫りになっている。

第1に、子どもの自治活動を指導するための教師の連携体制があげられる。教職員のアンケートでは、教職員の情報共有ができていることを評価するものもある一方で、高学年担任の荷重負担であることや、細部の情報共有という点で課題があったことが指摘されている。E教諭自身もそのことを自覚しており、次年度への引き継ぎ事項として委員会を中心とした分担と指導体制を提案している。他方で、教職員のアンケートでは、自治指導をめぐる教師の指導性をどのように発揮すればよいか困惑する様子が見られた。自治活動においては、子どもの主体性をひきだす教師の指導性が問われることになるが、本研究が対象とした実践においては、E教諭による個別の要望がなされていたものの、その具体的な指導方法については十分に共有されていなかった。子どもの

主体性をひきだす自治指導のあり方について、教職員で協議する機会をつくる必要があったと考えられる。このことは、自治活動が子どもの成長につながる仕組みを教師の指導との関係で解明することが研究課題となることを意味している。

第2に、低学年へのテーマの浸透があげられる。実践過程ではテーマが全校生のものとなるよう多くの配慮がなされていたが、教職員のアンケートでは、低学年にはテーマの理解が困難であったことが課題としてあげられた。E教諭は、テーマについてできるだけ全校生の理解が得られるように配慮していた。たとえば、全校生からテーマ案を募集していたこと、テーマ決定後は、D祭新聞でテーマの想いや願いを説明していたこと、児童会の代表が全校生に直接想いを伝えたことなどである。しかし、低学年が理解できるように説明することが意識されていたわけではない。テーマの想いや願いが全校生に理解されるような工夫が必要となる。

第3に、新型コロナウイルス感染症予防対策の方法があげられる。まず、6年生による事後アンケートからは、児童の待機場所での応援方法の工夫が不十分であり、飛沫・空気感染の予防が徹底できなかったことがあげられている。また、保護者アンケート調査からは、来場者の参観方法の工夫が不十分であったため、密になったり、参観者数の抑制につながったりしたことが課題とされている。さらに、コロナ対策部は、低学年への間隔指導が十分に行き渡らなかったため、コロナ学習を学校全体で徹底することが課題とされている。

第4に、「お祭り」としての運動会をどのように演出するのかということがあげられる。C小学校のD祭は、地域を意識し、地域を元気づけることを目標としていた。そのために、お祭りとしての演出が検討されたが、時間的な問題から実現に至らなかった。教師が地域のお祭りを教材研究し、運動会の演出へと関連づける方法を検討することが課題となった。

3. 意志表明の内容と運動会の価値

最後に、子どもたちによる意志表明の内容をふまえて、運動会の価値について考察する。テーマづくりの指導を通して、C小学校の子どもたちが設定したテーマには、次のような想いや願いが内包されていた。①「当たり前」にできたことが喪失されている今、

あらためて「当たり前」にできることを大切にしようという思い、②様々なことが中止・延期となる中で、今だからこそ、これまでとは違う新しい運動会を創造していこうという思い、③新しい運動会（D祭）やその意志をC小学校の伝統として今後も継承してもらいたいという思い、④運動会に参加する保護者や地域の人たちにも元気になってもらいたいという思い。このテーマの内容において興味深いことは、テーマの内容が社会的に意味のあるメッセージとなっていることである。子どもたちが経験しているように、コロナ禍においては、これまでの日常が喪失するとともに、これからはこれまでとは異なる生活様式がもたれられるようになっていく。C小学校の子どもたちの意志からは、「今だからこそ」、人間の創造性を発揮することで、これまで「当たり前」にあった生活的な豊かさを取り戻そう、さらには、新しいこれからの「当たり前」をつくりだしていこうという意志が感じられる。子どもたちが生活上の思いや願いから発信した意志は、きわめて社会的にも重要な意味をもつメッセージとなってあらわれている。かつて、東日本大震災後の運動会においても、運動会が亡くなった方の鎮魂と地域の復興を願う場となったように、地域全体が苦難や危機的状况におかれた際に、運動会が人々の人間的な豊かさや活力を奮起させるものとなっている。運動会は民衆によるお祭りとして人々の生活を活気づけてきた経緯をふまえれば（吉見，1999），地域が苦難や危機にあるとき、運動会の根源的な価値が顕在化してくると考えられる。他方で、戦後日本における運動会は、学習指導要領の改訂とともに、その位置づけが矮小化されていき、徐々に子ども主体の運動会づくりや地域と一体となった運動会づくりが後退させられてきた経緯がある（玉腰，2017）。新型コロナウイルス感染症は、こうした運動会の教育的意義や指導のあり方についても問題を投げかけていると言えよう。

XI 今後の課題

本研究では、実践事例をもとに今日の体育的行事の特徴を解明することができた。しかし、コロナ禍の運動会開催においては、命にかかわる極めて複雑な判断が必要となり、本事例のように必ずしも実践できるわけではない。また、研究方法においても、

アンケートの構成および実施にあたって課題がみられたため、包括的なデータを収集できていない。その意味で、本事例はあくまで1事例の分析であり、新型コロナウイルス感染症予防対策下における体育的行事の特徴を解明するためには、研究方法の精査やさらなる事例分析を必要とする。

注

- 1) なお、4年生については、子どもたちがメモ用紙を紛失したため、テーマ案が共有できていない。
- 2) えんぴつ対談では、例えば、次のような例がある。

子	コロナで変わったことってなんかあった？
親	マスクが売り切れて買うのに困った。
子	今だったらマスクが売り切れているところが少なくなってきたけれど、なんで？
親	知らない。会社が頑張ってるのでは？お母さんが知っている病院はまだ2日に1枚しかマスク配ってないけどな。コロナがなくなったら何したい？
子	ゲーセンいきたい。
親	お母さん、いっぱい買い物行きたい！ずっと遠出してないからストレスたっぷりやわ！
子	普段からストレスたっぷりじゃん。
親	それは、あなたたちが原因じゃん！どうしたらコロナがなくなると思う？
子	何をしてもコロナがなくなることはないんじゃない？
親	今はまた増えてきているけど、どうしたら減る？
子	密を避けて生活したらいいと思うけど、無理だと思う。
親	このまま増えていくと修学旅行も中止になってしまう。
子	それはぜったいに嫌だ！
親	1人1人が気をつけて今はがまんしないと、ずっと終わらないだろうな。修学旅行いけたらいいな！

- 3) 筆者らは、2021年10月17日に開催された、1年後のD祭の姿を調査した。当日のD祭を観察後、運動会づくりの特徴を把握するために、F校長およびI教諭への半構造化インタビューを実施した。前年度主担当となった6年担任のE教諭は異動し、前年度に5年担任であったI教諭が6年担任となり、D祭づくりの中心的な役割を担っていた。I教諭の指導は、前年度を踏襲し、子ども主体の運動会づくりとなっており、テーマづくり、自治活動、校長交渉などが指導されていた。

前年度同様に教職員は、子どもたちが「自分たちで企画・運営する」ことを重視し、待ちの姿勢を重視していた。F校長によると、子どもの主体性を重視するために、4月から6月にかけて、D祭を引き継ぐかどうかをあらためて議論したようである。そこでは、D祭を開催したいという意見が大多数であったが、開催したくないという意見表明もあった。教職員としては、正直な意見表明ができていることを評価した上で、子どもたちと一緒に、開催したくないという子どもの気持ちを考え、あらためて開催するかどうか、どのようなD祭にするかを何度も議論したという。話し合いを重ねる中で、次第に開催したくないという意見が減少していき、最後は全員が開催すると回答したという。F校長は、子どもたちが自分たちでD祭を創造する際に、民主主義的なプロセスを尊重するよう指導したと述べている。こうした指導姿勢からも、D祭の教育方針が継承されている様子が把握できる。D祭の企画・運営の方法については、前年度の総括をふまえ、委員会活動と関連させてD祭づくりの役割を分担させ、各委員会担当の教諭が指導担当となることで、連携体制を強化していた。また、全校生が発達段階に応じてD祭づくりに関われるように配慮したり、応援合戦や全校生競技では事前の予行練習の時間を保障したりした。その結果、前年度よりもより組織的な動きができるようになったと総括している。

一方で、I教諭は、今年度の運動会においても「お祭り」としての特性を引き出しきれなかったと総括している。当初、I教諭も「お祭り」としての運動会づくりを意識していた。しかし、8月から県下に緊急事態宣言が発令され、さらに感染拡大が続いたために9月末まで延長されていた。そのため、再延長を想定し、「お祭り」としての演出を控えることにしたという。

いずれにしても、学校全体で「子どもが創るD祭」を、その指導方針とともに継承されたことは貴重な実践事例だと考える。それだけ、C小学校の教職員が、自治的な体育的行事の教育的効果を理解していることを意味しているのではないだろうか。

もう1つ、I教諭へのインタビューから解明されたことがある。それは、E教諭とI教諭のD祭に対する解釈の差異である。E教諭は、運動会の

代替行事であったが、それは中止となった春の運動会を秋の運動会として復活させるという意志が強く、運動会の指導理論に依拠しながら実践に着手していた。一方で、I教諭は、D祭は運動会ではないと断言している。I教諭は、子どもたちも同様の認識していると前置きした上で、運動会は教師がある程度指導性を発揮するものであると考えていた。一方で、D祭は、「祭り」という表現に象徴されているように、運動会とは異なるものだと考えている。すなわち、子どもたちが自分たちで創り上げる学校独自の体育的行事である、という解釈である。このことは、本研究では、D祭をE教諭の位置づけに依拠して運動会実践として分析したが、他の教職員の中には運動会とは異なる体育的行事として解釈していたからこそ、子ども主体の運動会実践が成立していた可能性が示唆される。いずれにしても、I教諭のD祭についての理解は、運動会を教師の指導性が発揮される教育活動として狭義的に解釈するという意味で消極的である。一方で、新たな学校独自の体育的行事と位置づけることで、子どもたちが企画・運営する自治活動の指導が教職員の共通目標として合意され、連携体制が構築される可能性を示唆する意味で積極的である。この積極的な意味を加味するならば、本事例は、子どもたちが創造する運動会を学校全体のものとする実践的な展望を示唆するものであろう。

文献

- 上野山小百合・大津紀子（2017）子どもが動き出す授業づくり．いかに社．
- 神谷拓・伊藤嘉人・玉腰和典（2012）東日本大震災後の運動会：学校の統廃合をめぐる教師、生徒、地域住民の「意志」の諸相．宮城教育大学紀要、47：163-185．
- 神谷拓（2017）対話でつくる教科外の体育．学事出版．
- 国立生育医療研究センター（2020）コロナ×こどもアンケート第3回調査報告書．http://www.ncchd.go.jp/center/activity/covid19_kodomo/report/CxC3_finalrepo_20201202.pdf（最終アクセス日：2021年1月25日）．
- 城丸章夫（1993）第4巻生活指導と自治活動．城丸章夫著作集編集委員会編，青木書店，p.49．
- 制野俊弘（2012）学校を人間と地域の再生の場に、

- 運動文化研究, (29) : 59-66.
- 制野俊弘 (2020) 子どもが<いのち>に見える－コロナ禍で息を潜める子どもたち. 発達, (164) : 76-81.
- 玉腰和典 (2017) 運動会の歴史. 神谷拓編, 対話でつくる教科外の体育, 学事出版, pp.28-39.
- 福田洋・江口泰正 (2016) ヘルスリテラシー：健康教育の新しいキーワード. 大修館書店.
- 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領.
- 文部科学省 (2020) 文部科学大臣記者会見録 (2020年9月4日). https://www.mext.go.jp/b_menu/daijin/detail/mext_00088.html (最終アクセス日: 2021年2月15日).
- 文部科学省 (2021) 児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議配付資料3 (2021年2月15日) コロナ禍における児童生徒の自殺等に関する現状について. https://www.mext.go.jp/content/20210216-mxt_jidou01-000012837_003.pdf (最終アクセス日: 2021年2月18日).
- 渡辺孝之 (2012) 浜市小復興の歩み. 運動文化研究, (29) : 41-53.
- 吉見俊哉 (1999) ネーションの儀礼としての運動会. 吉見俊哉・白幡洋三郎・平田宗史・木村吉次・入江克己・紙透雅子著, 運動会と日本近代, 青弓社, pp.7-53.

付記

本研究の遂行にあたり, 調査にご協力いただいたE教諭をはじめ, C小学校の子どもたち, 教職員, 保護者の皆様には心より感謝申し上げます。

(2021年10月20日受付)